

二〇二二年度の活動

概要

史料編纂所は、古代から明治維新期にいたる前近代の日本史料を研究する東京大学の附置研究所である。国内外に所在する史料の調査・収集と分析をおこない、これを日本史の基幹史料集として編纂・公開している。一九〇一年の『大日本史料』『大日本古文書』の刊行以来、史料の性格に応じて新しい書目を加えつつ、約二二〇冊を刊行してきた。研究部は、教授一八、准教授二〇、兼任教授一、助教一六、特任助教一、客員教授一から成り(二〇二四年一月一日)、あわせて技術部(史料保存技術室)、図書部、事務部を擁している。

史料編纂所は、基幹史料集の編纂・刊行によって前近代日本史研究の基礎を支えるとともに、蓄積した史料情報や研究の成果を幅広く学界・社会・市民に提供・発信する努力を重ねてきた。二〇一〇年からは「日本史料の研究資源化に関する研究拠点」として活動しており、第四期中期目標・中期計画期間(二〇二二～二七年)においては東京大学における唯一の文系拠点となっている。

コロナ禍以来、本所が歴史情報処理システム(SHIPS)から提供する史料情報・歴史情報の有用性・重要性はひろく認知されるようになった。情報基盤等については五年ごとにリリースを実施して、最新・最適の状態を保つよう努めている。近年は、本所所蔵の禅籍の画像・翻刻を公開する「策彦周良文集」や、長大な絵図にメタデータを付した「都城島津邸所蔵『琉球并諸島図』デジタルアーカイブ」などの、デジタルギャラリを充実させ、利用者に自由度の高い閲覧環境と、分析・考察のための豊富な材料を提供している。

本所が公開する三〇種を超える各種データベースに、二〇二二年度には八〇〇万超のアクセスがあり、幅広く利用されている。とくに、昨年度実施し

たユーザーインターフェース刷新の効果で、横断検索の利用が伸びている。また、二〇二三年末の段階で、閲覧室の端末やWeb上で、二一〇〇万件超の史料画像が公開されている。

二〇一九年一〇月から日本学術振興会(JSPS)の委嘱を受けて実施している人文学・社会科学データインフラストラクチャー構築推進事業は、史料編纂所が人文学唯一の拠点機関として活動してきたが、二〇二二年度末で事業期間満了となった。二〇二二年度からは後継事業となる人文学・社会科学データインフラストラクチャー強化事業が始まることとなり、九月に東京大学が中核機関として採択された(事業期間は二〇二三年一〇月～二〇二八年三月)。構築推進事業では、本所は五つの拠点機関のうちのひとつとして参加していたが、強化事業においては制度設計が変更され、人文学・社会科学両分野について、構築推進事業で作り上げたJDcat(人文学・社会科学総合データカタログ)を主体的に運用し、事業全体の運営について中心的役割を担う「中核機関」を置く形となった。史料編纂所・社会科学研究所が協力して、中核機関・東京大学として事業を推進する。人文学分野については、構築推進事業の成果を継承し、博物館や資料館、自治体、大名家・公家関係文庫等、多彩な史料所蔵機関と連携して、史料のデジタル化や公開を進め、わが国の文化・学術資源の継承と普及に寄与したい。

以上のように、人文学・社会科学データインフラストラクチャー強化事業遂行にあたって、本所は社会科学研究所とあらたな連携関係を結ぶことになった。そのほかの学内連携としては、地震研究所との連携による地震火山史料連携研究機構がある。設置期間は二〇一七～二三年度の七年間だが、二〇二四～三三年度の再設置の申請が認められ、歴史学者と地震学者・火山学者が協力して地震活動や火山活動の長期的な情報の収集と分析を継続していく。また、二〇二三年一二月から、空間情報科学研究センター(CSIS)を主管部局とするデジタル空間社会連携研究機構(DSS)にも参加している。

史料編纂所の研究者は、個人および各種のプロジェクトによる共同研究など、多様な研究活動に従事し、また、大学での学部・大学院教育への参画、PDや若手・外国人研究者の受け入れを通じ、国際的に通用する日本史研究者の育成にも貢献している。研究所の基幹史料集や、個人・チームによる研究成果（著作）の一部は、東京大学のサイト「東京大学教員の著作を著者自身が語る広場 UTokyo BiblioPlaza」から紹介されている。

二〇一九年度にIR・広報室を設置し、研究マネジメントの強化を図っている。研究広報活動を積極的に展開し、本所HP・公式X(旧Twitter)、フォロワー数六〇〇〇超)での広報に加え、プレスリリース・大学本部広報での情報発信を行った。EARS(日本資料専門家欧州協会)年次大会への参加(ベルギー・ルーベンカトリック大学)、オープンキャンパスでのライブ配信などを実施した。要覧・所報・研究紀要等の編集を担当するほか、外部資金獲得等について、所内研究者にさまざまな情報提供も行っている。また二〇二四年二月には、IR・広報室の企画により、本学ニューヨーク・オフィス(UTokyoNY)において「日本の歴史を伝え、つなぐー東京大学史料編纂所のこれまでとこれから」と題して、本所の活動を紹介するイベントを実施した。二〇二三年度は国際卓越研究大学の選定が行われたが、東京大学は残念ながら候補に認定されなかった。今後も「新しい大学モデル」の実現に向けて、スピード感と規模感をもった改革が進められ、大学や学術をめぐる状況は大きく変わっていくと思われる。本所としては、東京大学の目指すべき指針であるUTokyo Compassに沿って研究事業を充実させ、組織運営の効率化を進めていく。

【史料集の編纂と出版】

史料編纂所は、古代史料部門、中世史料部門、近世史料部門、古文書・古記録部門、特殊史料部門を置き、部門ごとに担当の基幹史料集を定めている。二〜三人のチームを組んで編纂を行い、それぞれ二〜三年の周期で編纂・出版を継続している。現在の刊行書目は三〇をこえる。

本年度は、次の史料集などの刊行を進めた。

『大日本史料 第八編之四十五』

『大日本史料 第九編之三十』

『大日本史料 第十編之三十一』

『大日本史料 第十一編之三十』

『大日本近世史料 広橋兼胤公武御用日記十五』

『大日本維新史料 類纂之部 松平昭休往復書翰留一』

『大日本古文書 家わけ第十 東寺文書之十九』

『大日本古文書 家わけ第十八 東大寺文書之二十五』

『日本関係海外史料 オランダ商館長日記 譯文編之十三(下)』

『大日本古記録 薩戒記 七』

『日本莊園絵図聚影釈文編四(中世三)』

『大日本古記録 薩戒記』(全八巻 本文七巻・目録一巻)と、画像史料解析センターが担当する『日本莊園絵図聚影』(全五巻(七冊)・釈文編四巻)

は、いずれも今年度で完結となる。このほかに編纂を継続しているシリーズとして、『正倉院文書目録』『大日本古文書 幕末外国関係文書』などがある。

近年、出版をめぐる状況は、厳しさを増している。とくに本所の基幹史料集のような重厚・精緻な出版物については、制作に必要な技術者等を確保するのが難しくなっており、書物の形をとらない成果公開の方法を、本格的に検討すべき段階に入ったと考えている。

基幹史料集の編纂事業と並行して、国内外の組織的系統的な史料調査・収集を実施している。二〇二三年度の史料探訪のうち、四〇件が報告されている。

【画像史料解析センターの活動】

画像史料解析センターでは、絵画史料・画像史料・古文書画像の三つの分野において、一六のプロジェクトが研究活動を行った。各プロジェクトが対象とする史料は多岐にわたり、莊園絵図、正倉院宝物図、長篠合戦図屏風、琉球諸島図、肖像画、近世都市図(以上絵画史料分野)、戊辰戦争期摺物、近世近代摺物、古写真(以上画像史料分野)、花押、くずし字、台紙付写真・ガラス乾板、金石文拓本、外交文書、犬追物資料(以上古文書画像分野)などについて研究をおこなっている。

このうち、荘園絵図については、絵図調査やトレース図作成をおこない、シリーズ最終巻となる『日本荘園絵図聚影 釈文編 四』（中世三）を刊行した。琉球諸島図については、前年度の成果を盛り込んだ「都城島津邸所蔵「琉球并諸島図」デジタルアーカイブ」のWeb公開を開始した。古写真については、国内外に所在する古写真の調査をおこなうとともに、海外での研究会にも参加した。他の史料についても、それぞれ調査や保全手当と撮影をおこない、データの蓄積や分析に努めている。

本所の歴史情報処理システム（SHIPS）上には、画像史料に関する多様なデータベースが構築されている。画像やそのメタデータをインターネット上で広く共有するために、他機関のデータベースシステムとの連携にも積極的に取り組んでいる。それらの機能改善や、コンテンツの追加・変更を日常的に行っており、本年度においては、「肖像情報」「歴史絵引」「金石文拓本」「電子くずし字字典」等の各データベースおよび「所蔵史料目録データベース」で新規データ・画像を追加した。

本センターでは、研究成果報告および活動記録の場として、『東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター通信』を発行している。本年度は第一〇号という節目に当たる号を刊行し、さらに一〇三号までを発行した。本「通信」については、東京大学学術機関リポジトリにおいて、近刊分のインターネット公開に着手している。本年度もこれを継続し、現在は第八七一一二〇号・五〇号別冊（第一―五〇号総目次）・第五一一〇〇号総目次を見ることができ（ただし、リポジトリ版では図版割愛のケースあり）。加えて、センター開設一〇周年記念研究会パンフレットや画像史料関係の目録・翻刻データを、同リポジトリに登録した。

【近代日本史情報国際センターの活動】

前近代日本史情報国際センターは、史料情報集約化ユニット、史料情報資源化ユニット、歴史知識高度利用化ユニットの三研究ユニットと、二〇二〇年に史料情報資源化ユニットの下に付設した原本史料情報資源化ミニユニットで構成され、研究業務を支える情報支援室と目録室が付属している。二〇二一年より、歴史知識高度利用化ユニットのもとで、データ駆動型歴史情報

研究基盤の構築プロジェクト（データ駆動型PJ）を実施している。上記のような体制により、本センターが中心となって史料編纂所の歴史情報研究を展開している。

史料編纂所は、二〇一九年度から日本学術振興会（JSPS）の人文科学・社会科学データインフラストラクチャー構築推進事業（データインフラ構築事業）における人文科学唯一の拠点機関に認定され、最高ランクSの中間評価も受けているが、本センターは一貫してその中核的な役割を果たしてきた。

データインフラ構築事業は二〇二三年三月末に終了したが、継続事業である人文科学・社会科学データインフラストラクチャー強化事業（データインフラ強化事業）が二〇二三年一〇月より開始した。この事業において、東京大学が中核機関として選定され、史料編纂所は社会科学研究所とともにその役割を担っていくことになった。本年度は、和歌山県湯浅町が所蔵する紀州の豪商菊池本家および菊池新家史料のカラーデジタル撮影データをHi-CAT Plusより公開したほか、後述のHILabより、オランダ国立文書館所蔵幕末・明治期日蘭関係史料目録データセットを公開するに至った。また、二〇二四年三月に、人文科学・社会科学データインフラストラクチャー強化事業フォーラム「データ共有・利活用促進のための研究基盤」、人文科学データシンポジウム「人文科学研究資源としてのデジタルデータ」を開催した。

二〇二三年三月二十七日、HILab(<https://lab.hi.u-tokyo.ac.jp/>)を公開した。HILabでは、先述のオランダ国立文書館所蔵幕末・明治期日蘭関係史料目録データセットのほか、くずし字データセット、正保琉球国絵図データセット、『日本中世気象災害史年表稿』データセットをAI・機械学習に応用可能なデータセットとして提供している。また、東京大学史料編纂所・史料集版面検索、歴史資料・古典籍の字形探索、幕末維新史料・横断検索システム、ナゾルくん、YAIISTといった実験的サービスも提供している。これらは、データ駆動型PJをはじめ、データインフラ構築事業、データインフラ強化事業、他機関システム連携、および関係する科研プロジェクトの研究活動における成果のうち、情報サービス・データセットを中心とした機能や要素を実験的に公開するサイトとして位置づけており、検証を経て、史料編纂所歴史情報処理システム（SHIPS）へ適用していく予定である。

SHIPSでは三〇を超えるデータベースを対象とした検索サービスのほか、デジタルギャラリー(<https://www.hi-u-tokyo.ac.jp/collection/digital-gallery/>)もサービスしている。本年度は、宮崎県都市との連携により、都城島津邸所蔵「琉球并諸島図」デジタルアーカイブをデジタルギャラリーから公開するにいたった。本デジタルアーカイブは、画像史料解析センター「琉球諸島図」プロジェクトと協働して構築を進めた。画像をWeb上で閲覧できるようにしただけでなく、絵図上に書き込まれた地名等の表記七五四件を画像上の位置に紐づけ、画像内検索を実現している。またIIIF(International Image Interoperability Framework)に対応した史料画像であることから、他機関が所蔵する国絵図との並列表示(比較)や、現代地図からのリンク(現代地図)といった表示方法も可能である。

二〇二二年度より開始した文部科学省の「AI等の活用を推進する研究データエコシステム構築事業」において、ユースケース創出課題として「異分野共創による史料学DXの確立」(代表者：尾上陽介教授)が採択され、二〇二二年度より二年間の予定で史料情報資源化ミニユニットが実施を担当している。本プロジェクトは、データ科学・データ駆動科学による形態的料紙データ分析をユースケースとして、史料調査と料紙分析、史料の修復・保存・活用、機関連携による技術開発・応用、地域連携と新たな人材育成、史料研究データ基盤構築を行い、実践可能な史料学DXのモデルを提示することを目的としている。二〇二三年九月、国立情報学研究所において、研究データエコシステム構築事業シンポジウム2023が行われ、本プロジェクトの進捗ならびに成果を報告した。

【共同利用・共同研究拠点の活動】

史料編纂所は、二〇一〇年に文部科学大臣より「日本史料の研究資源化に関する研究拠点」として認定され、共同利用・共同研究拠点としての活動を開始している。この研究拠点は、研究資源とその利用手段の充実により日本史研究の発展を願う研究者コミュニティの要望にこたえ、これまで蓄積してきた研究資源に加え、国内外に存在する日本関係史料について、国内外の研究者と共同調査・共同研究を行い、全体的・系統的な研究資源の蓄積と共

同利用を促進し、史料学研究・日本史研究の質の向上をめざすことを目的としている。

この目的を達するため、史料編纂所は特定共同研究と一般共同研究の二つの枠組みを設け、研究活動を実施している。特定共同研究は、古代史料・中世史料・近世史料・海外史料・複合史料の五つの領域がそれぞれ設定した課題について、共同研究者を公募するものであり、一般共同研究は、所外の研究者に課題と共同研究者を公募するものである。特定共同研究・一般共同研究の課題は、学外委員が過半数を占める東京大学史料編纂所協議会において、審査基準に則った評価をもとに審議の上、承認・採択されている。

国立大学法人の第四期中期目標・中期計画期間の二年目である本年度は、五八名の所外研究者の参加による五件の特定共同研究課題と、のべ二〇名の所外研究者とのべ六二名の所内研究者の参加による二四件の一般共同研究課題を遂行した。

今年度公にされた共同研究課題に関する研究成果としては、書籍(萩原大輔編『シリーズ・織豊大名の研究11 佐々成政』戎光祥出版、二〇二三年八月/黄霄龍・堀川康史編『海外の日本中世史研究「日本史」・自国史・外国史の交差』勉誠社、二〇二三年一月/金子拓『長篠合戦 鉄砲戦の虚像と実像』中公新書、中央公論新社、二〇二三年二月)や研究論文等が刊行・活字化されたほか、四冊の研究成果報告書がまとめられた。また、国際シンポジウム「モノとしての東ユーラシア世界の公文書」(於大韓民国・東国大学、二〇二三年八月九日)、東京大学史料編纂所・佐賀県立図書館主催シンポジウム「坊所鍋島家文書を読みなおす―成立期の佐賀藩と江戸幕府―」(於ホテルニューオータニ佐賀、二〇二三年一月一日)、東京大学史料編纂所・元興寺文化財研究所・大淀町連携シンポジウム「古文書がひらく中世の吉野」(於大淀町文化会館、二〇二四年三月一〇日)などのシンポジウムを開催したほか、「泉涌寺と女官」(泉涌寺宝物館心照殿、二〇二三年四月二五日)、「二〇二四年三月二四日」、「国宝多宝塔造立八〇〇年記念 高野山金剛三昧院―鎌倉殿を吊った寺院の軌跡―」(鎌倉歴史文化交流館、二〇二三年九月二五日)、「二月二日」、「江戸前期の泉涌寺と徳川政権」(泉涌寺宝物館心照殿、二〇二三年九月二六日)、「二月二四日」、「俊祐律師と四条天皇・御遠忌によ

る追福」(同前、二〇二三年一月二六日)、「二〇二四年四月二一日」、「細川コレクション特別展 土方歳三資料館×肥後熊本藩」(熊本県立美術館、二〇二四年一月一〇日)、「三月二四日」、「読んでみよう!吉野の古文書」(大淀町文化会館、二〇二四年三月六日)、「四月八日」などの展示に協力をした。そのほかにも、研究会での口頭報告、講演、講座のほか、共同研究で構築した「日本史用語翻訳グロッサリー・データベース」を史料編纂所ホームページから公開した(<https://www.hiu-tokyo.ac.jp/collection/digitalgallery/glossary/>)。共同研究で蒐集・作成された種々の史料画像・目録についても、図書館閲覧室や史料編纂所のデータベースを通して利用できるようにしており、様々な形で研究成果の発信、公開、学界・社会への還元を進めている。

【特定事業費、競争的資金および学内連携研究機構による大型プロジェクト】 一 天皇家・公家文庫プロジェクト

一 五年間連続した人文社会系屈指の大型科学研究費、(i)二〇〇七〜一六年度学術創成研究費「目録学の構築と古典学の再生」、(ii)二〇一〇〜一六年度基盤研究(S)「日本目録学の基礎確立と古典学研究支援ツールの拡充」、(iii)二〇一七〜二二年度基盤研究(S)「天皇家・公家文庫収蔵史料の高度利用化と日本目録学の進展」(研究代表者:田島公)以上、中間評価及び事後評価は共に全て「A」評価を継承し、二〇二〇〜二二年度の五年間の予定で実施している、概算要求事項「天皇家・公家の「知」の体系としての文庫・宝蔵研究拠点創設」事業(担当:古代史料部三室)では、二〇二一年度までに公開した、宮内庁書陵部図書寮文庫所蔵「家分け本」・山口県立山口図書館所蔵萩藩明倫館旧蔵今井似閑本・西尾市岩瀬文庫所蔵柳原家本のデジタル画像累計約六万四千件について、安定的なWeb公開を本所DB(SHIPS)のうちHECART Plusから行うと共に、二〇二二年九月より公開した宮内庁書陵部図書寮文庫所蔵の(Ⅰ)内匠寮本「中井家文書」の内、①「寛政度」京都御所造営関係文書(函号 E21101)と、(Ⅱ)同文庫所蔵「近世公家日記類」約一三万六千画像(有栖川宮家本・阿波国文庫本・桂宮家本・久我家本・御所本・青蓮院本・白川家本・鷹司家本・土御門家本・庭田家本・野宮

家本・橋本家本・葉室家本・日野家本・日野西家本・平田家本・松岡家本・壬生家本・函号)に家わけ記号のないもの(山科忠言卿記・泰重卿記他)のWeb公開の安定的な公開を継続した。これら、天皇家・公家文庫関係資料のデジタル画像累計約八二万画像の他、本所閲覧室の情報端末PCでも、京都御所東山御文庫所蔵禁裏本・同別置本、陽明文庫所蔵近衛家伝来本、小計約三三万画像、併せて総計約一一五万画像を公開中である(陽明文庫本に関しては、編纂所が提供した画像が、西日本では京都府立京都学・歴史館の京都学デジタル資料閲覧コーナーで公開中)。

本年度は、新規撮影及びマイクロフィルムからのスキヤニングにより、(A)宮内庁書陵部図書寮文庫所蔵の柳原家本(『続史愚抄』・『基量卿記』・『禁裏番衆所日記』・『柳原紀光日記』他)・野宮家本(『野宮定晴日記』・『野宮定之日記』・『野宮定功公武御用記』・『野宮定功修理職奉行備忘』他)・壬生家本(『孝亮宿禰記』・『于恒宿禰記』・『忠利宿禰記』・『敬義宿禰記』他)等を三〇五八画像、(B)京都御所東山御文庫本・同別置本を三四〇五六画像、合計六四七四画像を蒐集し、公開準備を進めた。これにより蒐集した天皇家・公家文庫関係資料のデジタル画像の累計は、目標の一五〇万画像までと約二七万画像に迫る、累計約一二三万画像となった。更に、①「寛政度」京都御所造営関係文書の残りの帳簿類約二万画像のデジタル画像の蒐集を完了し、二〇二四年四月一〇日よりWeb公開したので、近世公家関係・内裏造営研究のための研究環境は大きく進展することが予想される。

研究成果の公開では、二〇二三年一月九日に京都府立京都学・歴史館に日本史や建築史の研究者・大学院生等約六〇名が集い、第四回国際研究会「御所(宮殿)・邸宅造営関係資料の地脈と新天地」を開催した。建築史学と文献史学とが融合し、上記デジタル画像等を活用した研究報告ができた。また、二〇二三年度から古代の宮殿研究のシンポジウムを開催することとなり、第一回を九月三〇日に「飛鳥宮の儀礼と空間構成」と題して奈良県立橿原考古学研究所の協力のもと、同所で開催した。約五〇名の研究者が参加し、シンポジウムにあわせて作成した報告集は増補改訂のうえ二〇二四年度に八木書店から出版予定である。また、歴史館では一月二六日に「陽明文庫資料からの新発見Ⅳ」をテーマに二四四名の参加者を得て、「第一四回陽明文庫

講座」を開催し、同時に『陽明文庫講座図録』五も刊行し、一六件の史料の紹介・検討を収載した。更に金鶏会館（県立長野高校同窓会館）で市民向け公開講座「続・古典を読む―歴史と文学」全七回を対面で開催し、延べ約五四〇人が受講した。その成果の一端は、過去の講座内容も含め、『新発見史料・新解釈による古代〜中世前期の信濃―「信濃史料」古代編（二・三巻）に係る未収史料の収集に関する基礎的研究』の成果』（二〇二三年度本所研究成果報告書）で示した。関連して、プロジェクトで採用している特任研究員佐竹朋子が『近世公家社会と学問』（吉川弘文館 二〇二三年二月）を、古代史料部の田島公が『蔵書目録からみた天皇家文庫史』（塙書房 二〇二四年三月）を刊行した。なお、プロジェクト期間内の刊行を目指し『新訂増補日本古代人名辞典』上・中・下（吉川弘文館より刊行予定）の編纂も行っている。

二 維新史料研究国際ハブ拠点形成プロジェクト

本プロジェクトは今年度が最終年度となるが、史料編纂所の維新史料網要データベースによる、国際的な幕末維新期研究の基盤形成をめざし、網文データの英訳事業を進めた。外国人研究員と共同してデータの蓄積・更新につとめ、関連のグロッサリーを構築している。維新史料網要データベースでは、各網文データの詳細表示画面上にその英訳を併記して表示し（現在登録済みデータのみ）、また同英語版のSummary database of the Isin Shiryōとして、英語キーワードによる検索と結果表示を実装している（詳細検索については、なお今後の課題として残されている）。こちらの英語版についても、アップロードされたデータはキーワード検索可能である。最終年度においても、大型料研費等の外部資金による研究プロジェクトと連携しており、引き続き本所所蔵の特殊蒐書コレクションである史談会本の撮影・データ化をおこなった。

今年度も在外外国人研究者の協力を得て国際研究会を開催した。二〇二三年一月一八日開催の国際研究会「維新史料研究と国際発信」では、Web会議システムを用いて報告・討論をおこなった。今回の報告者としては、合衆国から日本史研究者のD・ポツマン教授を招聘し、またL・ロバーツ教授およびR・ヘリヤー教授も招聘して、幕末維新期の研究課題をめぐって討

議していただいた（日本側の報告者は、保谷徹東大名誉教授）。また、これまでに収集したロシアならびにドイツに所在の日本関係史料データについて、目録データベース（Hi-CAT Plus）へのアップロードおよび公開に向けての作業をすすめ、さらに横浜開港資料館との連携によるフランス外務省史料等のデータ共有・公開に向けての作業もおこなった。従来史料編纂所図書室で公開してきている在外史料画像（Hi-CAT Plusを介したデータ公開による）の全体を視野に入れることで、幕末から近代にかけての外交史について、さらなる検証を推進してゆくことが可能となった。

三 前近代地震火山史料研究プロジェクト

史料編纂所では、現在、地震研究所と連携して前近代の地震火山史料を研究するプロジェクトを二件実施している。一つは、二〇一四年度より開始した地震・火山噴火予知研究協議会史料・考古部会の研究課題「文献史料による歴史地震に関する情報の収集とデータベースの構築・公開」に引き続き二〇一九年度より取り組んでいる「地震火山関連史料の収集・分析とデータベースの構築・公開」である。これは既刊の地震史料集の全文テキストデータベース化を進める取り組みであるが、二〇二二年度に『増訂大日本地震史料』『新取日本地震史料』全冊のテキスト化が完了し、「地震史料集テキストデータベース」として一般公開を開始した。本年度は、既刊史料集掲載史料を史料原文と対照させて校訂を進めた。また全文テキスト中の地名を自動的に抽出するための検討を行った。また試験段階であるが、自動抽出の精度を高め、地震を感じた場所に位置情報を付与し、地図上に表示できるようにしていく計画である。

もう一つは史料編纂所と地震研究所が連携して前近代の地震火山史料研究を行うために、二〇一七年度より学内に設置した地震火山史料連携研究機構（設置期間七年間）における取り組みである。ここでは既刊・未刊を問わず、日本国内の諸地域における有感地震記録を定点観測的に収集する研究プロジェクトを進めている。特に一九世紀の日記史料から有感地震記事を収集し、データベース化する取り組みを行っている。本年度は、既刊史料集や史料編纂所架蔵史料からの採録のほか、山口県山口市、愛媛県宇和島市、大分県佐伯市、熊本県熊本市などでの史料調査を行った。また地震研究所の教員と連

携して、教養学部で文系・理系の学生を対象に学術フロンティア講義「歴史資料と地震・火山噴火」を開講した(履修者一九二名)。

四 連携研究機構ヒューマニティーズセンター等におけるプロジェクト

連携研究機構ヒューマニティーズセンターは、人文学の振興を目指して二〇一七年七月に、五年間の予定で設置された。二〇二二年度に、あらたに人文社会科学研究科を主管部局として、企画・運営体制を強化して再設置され、活動を継続している。史料編纂所も引き続き連携部局として参加協力する。今年度は四名の教員が公募研究・協働研究等のメンバーとして活動した。また、同センターでの公募研究の成果として、二〇二四年一月に国際共著一点(稲田奈津子・王海燕・榊佳子編著『古代東亞世界的買地券』浙江人民出版社)が刊行された。

このほか外部経費等を得た多くのプロジェクト研究が行われている。今年度は、研究所の研究成果報告書シリーズとして、史料目録・史料翻刻等を含め、計七冊が刊行されている。

【国際交流と史料蒐集活動】

史料編纂所では、早くから海外所在の日本関係史料に注目し、日本学士院・国際学士院連合(UAI)などの支援を得て、調査・収集を行ってきた。日本学士院は一九一九年に国際学士院連合に加盟し、共同研究活動に参画しているが、その代表的なものが一九二二年から始まった海外における未刊行日本関係史料の調査事業である。本所は一九五四年から、その一環である「在外未刊日本関係史料の複本作成事業」を委嘱されている。

近年では、欧米での調査に加え、東アジア諸国やロシアの関係機関との交流も深め、これらの国々における調査・収集にも取り組んでいる。また、日本・中国・韓国を代表する歴史研究編纂機関の友好協力関係の基盤を形成するために「東アジア史料研究編纂機関協議会」を設け、理事機関として参加し、定期的に国際学術会議を開催している。コロナ禍によって、二〇二〇年度に実施予定であった国際学術会議が延期となり、二〇二二年一月にようやくオンライン開催となる(韓国国史編纂委員会主催)などの困難はあったが、次回は再び対面開催に戻す見通しである。二〇二五年度に史料編纂所主催で

行われる予定で、対応のための小委員会の体制を強化して準備につとめている。また二〇二四年二月に、本学ニューヨーク・オフィス(UTokyoNY)において「日本の歴史を伝え、つなぐ」東京大学史料編纂所のこれまでとこれから」と題するイベントを実施した。一五〇年に及ぶ史料の調査・収集、基幹史料集の編纂、学術情報と研究成果の公開・発信等を紹介するほか、「落合左平次道次背旗」の修理や「長篠合戦屏風下絵」の彩色復元模写など、文化財の修復・復元の過程や研究成果について、展示も交えて説明した。対面とZOOMによるハイブリッド方式で、一四八名の参加を得て、たいへん好評であった。

【貴重史料の調査・研究と保全事業】

東京大学史料編纂所が所蔵する史料(国宝一件・重要文化財二〇件を含む原本史料二〇万点など)の適切な保存管理は重要な課題である。特に貴重史料については予算確保に努めて修理を実施するとともに、解体等の際のみ可能となる調査・研究を継続している。二〇二二年度には以下の事業を行った。

- ①二〇二〇年度より「原本史料情報解析」の方法による南九州関係文書の保全と研究」プロジェクトを開始し、鹿児島を中心とする南九州地域に関わる原本史料の保全・研究・社会還元事業を進めている。史料保存技術室では「島津家文書」の修理を継続しており、二〇二三年度は「入来院文書」三巻(文書五一点)の解体と料紙データの採集、修理作業を行い、その結果、正文と疑文書を見分けることができた。また、西国武家文書の「湯原家文書」二一九点の補修紙選定及び補修作業を進めている。このほか二〇二二年度より国の国宝重要文化財等保存・活用事業費補助金の交付を受け、史料編纂所所蔵の国宝「島津家文書」および重要文化財「蔣洲咨文」「明国箭付」の修理事業を進めており、その過程で島津家文書の白眉とされる手鑑『歴代亀鑑』が製作された経緯が判明するなど、新たな知見を得つつある。
- ②画像史料解析センターのプロジェクトの一環として、所蔵するガラス乾板の保全(クリーニング・状態調査の作成)・養生(包材・保存箱への収納)を、当該技術をもつ民間業者の協力を仰いで内製化するとともに、破損度の高いものは依頼して作業を進めた。

③二〇二三年度においても感染症対策のため、引き続き閲覧室の利用を一部制限せざるを得なかった。史料のデジタル化推進の重要性が改めて認識される中、今年度も東京大学デジタルアーカイブズ構築事業により、史料編纂所所蔵特殊蒐書「島津家本」のデジタル化を進め、一六一点を撮影した。これらの高精細貴重史料画像は史料編纂所の「所蔵史料目録データベース」などからWeb公開を進めている。

以上のほか、史料編纂所書庫の環境整備のため、設備の更新や書庫内配置の再検討・移動などに引き続き取り組み、貴重史料の保存と整理に必要な書庫スペースの捻出に努めている。

これらの活動は、「歴史資料を未来に伝える保存技術の研究とその共有化」として東京大学未来社会協創推進本部の登録事業となっている。教員とともに、修補・撮影等を専門とする史料保存技術室の職員が積極的にかかわり、大きく貢献している。さらに史料の管理・保全全般を担う図書部も、史料の整理・登録や画像公開・史料利用者への対応・書庫の環境整備などに尽力している。

【未来社会協創推進本部プロジェクト】

二〇一五年に国連総会で採択されたSDGs（持続可能な開発目標）を、指定国立大学の課題として、東京大学に設置された未来社会協創推進本部のもとで取り組んでいる。史料編纂所では、「日本各地域の文化資源保全と地域アイデンティティ構築への貢献」「歴史資料を未来に伝える保存技術の研究とその共有化」「データ駆動型歴史情報研究基盤の構築」の三件のプロジェクトを登録して活動している。

【社会連携・公開・発信】

史料編纂所の史料調査・収集事業は、上述の外部資金によるプロジェクトや共同利用・共同研究拠点のプロジェクトを通じて、地域の博物館・資料館や地方公共団体の関係機関と連携した取り組みとなっている。横浜開港資料館とは、Hi-CAT Plusによる史料画像の連携公開を進めており、イギリス国立公文書館（連携公開中）、フランス外交文書館、ドイツ連邦文書館、プロ

イセン枢密文書館、ドイツ連邦軍事文書館などが所蔵する日本関係史料データの共有・提供について協議し、公開の準備を進めた。また、データインフラ強化事業によって、都城島津邸所蔵「都城島津家史料」、「菱刈文書」、および、海の見える杜美術館「岩倉具視関係史料」について、新たに史料画像四六〇二点を受入れ、Hi-CAT Plusを介してWeb公開した。

市民への公開・発信という面では、所内のさまざまなプロジェクトによる取り組みのほか、二〇一六年以来、本所の企画により文京アカデミア講座（文京アカデミア主催、史料編纂所協力講座）を継続して開講してきた。二〇二三年度は、前期（六〜七月）は「歴史を伝える手紙」、後期（一〇〜十一月）は「史料から読み解く徳川家康」というテーマで、各五回を実施した。実施後のアンケートによれば、受講生の満足度は一貫して高い水準にあり、個別の感想も高評価である。受講希望者も増加している。これに加え、名古屋・栄中日文化センターで五回の協力講座、秋田県生涯学習センター主催のあきたスマートカレッジでも五回の協力講座を実施した。

【教育への参画、学部・大学院教育】

史料編纂所の教員は、本学の人文社会系研究科（日本史学、文化資源学）や大学院情報学環・学際情報学府における大学院教育に参加している。また、全学自由研究ゼミナールなど、教養学部の学部教育にも携わっている。あわせて、日本史の研究についてのRA制度を設けて本学院生への研究支援を行っている。また多くの教員は、学外の国公私立大学で非常勤講師を兼務するなど、幅広く大学の日本史教育に従事している。さらに、日本学術振興会の特別研究員の受入れや、海外の若手研究者（DC院生等）を外国人研究員として受け入れるなど、内外の若手研究者育成に貢献している。

【教員評価、外部評価】

『東京大学史料編纂所報』は、当該年度の各種の研究活動を集約して、記録する役割を果たすだけでなく、研究所における研究活動状況を自ら点検・総括する自己評価活動の媒体としても機能するものと考えている。

個々の教員の評価は、教授任用から一〇年を経過した段階で、自己評価に

加えて、所外委員による評価を行うほか、全教員を対象とした定期的な教員評価(教授・准教授・助教を三つのグループに分け、原則として三年で二巡)を行っている。二〇二三年度は、教授業績外部評価には該当者がなく、常勤教員一六名を対象として、定期的な教員評価を実施した。

古代史料部門

二〇二三年度は、第一室が『正倉院文書目録』十続々修五の、第二室が『大日本史料』第二編之三十三(長元六年正月)の、第三室が第三編之三十一(保安四年正月)の、第四・五室が第五編之三十八(建長四年正月)の、編纂をそれぞれ行った。

本部門所属教員(以下、部門教員。兼任教員も含む)が加わった(I)所内プロジェクト研究は以下の通り。

(I) データベース関係 「正倉院文書マルチ支援データベース SHOMUS」・「奈良時代古文書フルテキストデータベース」(担当・第一室)、「編年史料(古代) 編纂支援資源化データベース MIDOH」(担当・山口英男)、「H-CAT Plus(禁裏公家文庫)」(担当・第三室)、「歴史絵引データベース」・「所蔵肖像画模本データベース」・「肖像情報データベース」(担当・藤原重雄)、「南北朝遺文フルテキストデータベース」・「日本史用語翻訳グロッサリー」・データベース(旧応答型翻訳支援システム) (担当・堀川康史)等を担当した。また科学研究費・研究成果公開促進費(データベース)「大日本史料総合データベース(平安時代・全文)」(代表者・山口)により、『大日本史料』第一編第十一〜十五の全文テキストを生成・登録・公開した。これにより『大日本史料』第一編第一〜十五(約二二三〇〇頁、約三二三〇〇件)の全文データが大日本史料総合DB及びMIDOHから一般公開となった。

(2) 共同利用・共同研究拠点「日本史史料の研究資源化に関する研究拠点」の研究課題 ①特定共同研究では、『古代史料領域』「奈良平安時代の大規模写経群形成に関する史料学研究」小川八幡神社般若経を核として(代表者・稲田奈津子、所内共同研究者・山口・黒須友里江・小塩慶)、「複合史料領域」「荘園絵図調査方法論の高度化と調査関連情報の学術資源化に関する

研究」(所内共同研究者・藤原)を担当した。②一般共同研究では、「日本史用語グロッサリーの再構築にむけて」(代表者・Nadia Kangawa、所内担当者・小塩、所内共同研究者・堀川)、「吉野修験関係史料の調査」(代表者・服部光真、所内共同研究者・堀川)、「中井家文書」の建築指図と帳簿類の総合研究」(代表者・海野聡、所内担当者・新井重行、所内共同研究者・田島公)、「蒐集デジタル画像を用いた『魚魯愚鈔』の情報資源化及び平安・鎌倉期の除目書の総合的研究」(代表者・志村佳名子、所内担当者・田島、所内共同研究者・新井・小塩)、「智感版般若経の研究資源化を通じた中世後期東国宗教文化の研究―慶珊寺本を中心に」(代表者・梅沢恵、所内担当者・堀川)、「富山県下(越中国) 中近世文書の研究資源化」(代表者・萩原大輔、所内共同研究者・田島)に参加した。二〇二一年度一般共同研究「『信濃史料』古代編(二・三巻)に係る未収史料の収集に関する基礎的研究」(代表者・福島正樹、所内担当者・田島、所内共同研究者・山口)の成果として、田島企画・監修『新発見史料・新解釈による古代・中世前期の信濃―『信濃史料』古代編(二・三巻)に係る未収史料の収集に関する基礎的研究』の成果」(東京大学史料編纂所研究成果報告二〇二二一五)を、二〇二一年度一般共同研究「静嘉堂所蔵古写経群の研究資源化」(代表者・浦木賢治、所内担当者・稲田、所内共同研究者・山口)の成果として、静嘉堂所蔵古写経群の研究資源化プロジェクト編『静嘉堂所蔵古写経群の調査と研究』(東京大学史料編纂所研究成果報告二〇二二一三、(公財) 静嘉堂調査報告書)を、上記「中井家文書」の建築指図と帳簿類の総合研究」の成果として、「内裏造営関係基礎史料集」(東京大学史料編纂所研究成果報告二〇二二一七)を刊行した。

(3) 画像史料解析センター研究プロジェクト「正倉院宝物図プロジェクト」(代表者・稲田、メンバー・山口・藤原・新井)、「荘園絵図聚影」 釈文編・中世出版プロジェクト」(代表者・藤原、メンバー・稲田・山口)、「中近世肖像画研究プロジェクト」(代表者・藤原)、「中世花押の編年研究プロジェクト」(代表者・堀川)、「近世都市図解析プロジェクト」(メンバー・藤原)、「電子くずし字字典データベース開発プロジェクト」(メンバー・稲田・新井)、「金石文拓本史料の整理と公開」(メンバー・稲田・藤原)、「本所所蔵台紙付

写真・ガラス乾板に関する研究プロジェクト」(メンバー・藤原・新井)を担当した。

(4) 概算要求事項(事業費)「天皇家・公家の「知」の体系としての文庫・宝蔵研究拠点創設」事業(担当・第三室)二〇二〇～二〇二四年度の四年度目。蒐集したデジタル画像の内、宮内庁書陵部図書寮文庫所蔵柳原家本・内匠寮本「中井家文書」等のデジタル画像のHi-CAT PlusからのWeb公開準備(二〇二四年四月より公開)を行うと共に、同プロジェクト主催の公開講座・研究集会として、一般社団法人長野教育文化振興会の協力を得て金鶏会館連続公開講座「『古典から読み解く歴史学・文学』秋季・冬季・春季を、公益財団法人陽明文庫・京都府立京都学・歴史館との共同で第一四回「陽明文庫講座」を、奈良県立橿原考古学研究所及び基盤研究(A)「東アジアにおける工匠関連史料にもとづく建築生産史の再構築と技術蓄積・伝播の解明」(研究代表者・海野、以下海野科研と略称)と共同でシンポジウム「飛鳥宮の儀礼と空間構成」を、京都府立京都学・歴史館及び海野科研と共同で第四回国際研究集会「御所(宮殿)・邸宅造営関係資料の地脈と新天地」をそれぞれ主催し、名和修・金田章裕・田島企画・監修「陽明文庫講座図録」5(東京大学史料編纂所研究成果報告二〇二二・三)を、田島・海野・鶴見泰寿企画・監修「シンポジウム「飛鳥宮の儀礼と空間構成」報告集」(東京大学史料編纂所・奈良県立橿原考古学研究所)を、それぞれ刊行した。また、二〇一七～二一年度基盤研究(S)「天皇家・公家文庫収蔵史料の高度利用化と日本目録学の進展―知の体系の構造伝来の解明」を引き継ぎ、『増補改訂版日本古代人名辞典(仮)』上・中・下の編纂を行っている。

(5) その他「正倉院文書目録」編纂のための調査等を、部門教員等が加わった「正倉院文書」プロジェクト(担当・第一室)として実施している。部門教員が加わった(Ⅱ)所外プロジェクト研究は以下の通り。

(Ⅰ) 科学研究費のうち部門教員が研究代表者となった研究課題 基盤研究(C)「東アジア墓葬文化の伝播と展開―金石文資料の形態的分析を中心に―」(代表者・稲田)・若手研究「平安時代後期政治構造の史料学的研究」(代表者・黒須)・若手研究「今川了俊関係史料の分析による室町幕府地方支配の研究」(代表者・堀川)。その他、海野科研の分担金(研究分担者・田島・

新井)により、海野・田島企画・監修「国際研究集会「御所(宮殿)・邸宅造営関係資料の地脈と新天地」報告集(四)」(東京大学大学院工学系研究科建築学専攻海野研究室)を刊行した。

(2) 受託研究費 福岡市史編纂委員会「福岡市域に関わる史料の調査及び研究」(担当・山口)、「南北朝遺文フルテキストデータベースの作成支援」(担当・堀川)。

上記編纂・研究活動に伴い部門教員が中心となって継続している史料探訪では、京都御所東山御文庫(宮内庁侍従職管理)史料、宮内庁正倉院事務所正倉院文書、公益財団法人陽明文庫近衛家伝来史料・和歌山県立博物館寄託小川八幡神社大般若経等の調査があり、デジタル画像の蒐集・公開に関する活動では、蒐集した京都御所東山御文庫禁裏本・同別置本のデジタル画像の閲覧室情報端末での公開準備がある。

二〇二三年三月二五・二八日に、本部門担当で第二九二回研究会を開催した。本部門からは田島教授が「禁裏・公家文庫研究」プロジェクトの成果と未来、山口教授が「正倉院文書の機能・形態・保管情報をめぐって―「正倉院文書目録」の編纂から―」と題し、それぞれ定年退職を前に長年の研究・編纂活動の成果をもとに論じた。

以上、詳細については、「史料研究・成果公開」・「所員活動報告」・「史料探訪」・「研究発表会」等、関係の各項目を併せて参照されたい。

中世史料部門

二〇二三年年度の刊行物として、編年第八室が『大日本史料 第八編之四十五』を、編年第九室が『大日本史料 第九編之三十』を、編年第十室が『大日本史料 第十編之三十一』を、編年第十一室が『大日本史料 第十一編之三十』をそれぞれ刊行した。出版物の概要については、「出版報告」の項を参照されたい。

共同利用・共同研究拠点「日本史料の研究資源化に関する研究拠点」の活動では、特定共同研究の中世史料領域「賀茂別雷神社文書・社家文書の調査・研究」に代表者として一名、所内共同研究員として一名、複合史料領域

「荘園絵図調査方法論の高度化と調査関連情報の学術資源化に関する研究」に所内共同研究者として三名、それぞれ部門員が参加した。

また一般共同研究では「松尾大社所蔵史料の研究資源化」に二名、「高野山子院伝来資料の分野横断的研究―金剛三昧院・西南院を中心に―」に一名、「史料編纂所所蔵明清中国公文書関係史料の比較研究」に二名、「日本史用語グロッサリーの再構築にむけて」に一名、「吉野修験関係史料の調査」に一名、「智感版大般若経の研究資源化を通じた中世後期東宗教文化の研究―慶珊寺本を中心に―」に二名、「福田文書の調査・研究」に一名、「近江国惣村文書を対象とした横断的原本研究の試み」に一名、「大阪青山大学所蔵武家受発給文書に関する基礎的研究―室町幕府文書を中心に―」に二名、「対馬西山寺関係文書の総合的研究」に一名、「富山県下（越中国）中近世文書の研究資源化」に一名、それぞれ部門員が所内共同研究者として参加した。

史料探訪、科学研究費等による研究、所内研究プロジェクト等についても、本年度も多くの部門員がそれぞれの立場で参加した。件数も人数も多いため、これらについては「所員研究活動」の項で各自が報告しているので、そちらを参照していただきたい。

近世史料部門

二〇二三年度の各室の編纂・出版活動等は以下の通りであった。近世第一室・『大日本史料』第十二編之六十四出版準備／近世第二室・『大日本近世史料 細川家史料』二十九出版準備／近世第三室・『大日本近世史料 市取締類集』三十三出版準備／近世第四室・『大日本近世史料 広橋兼胤公武御用日記』十五出版・『大日本古文書 家わけ第十六 島津家文書』八出版準備／維新第一室・『大日本維新史料 類纂之部 松平昭休往復書翰留』一出版／維新第二室・『大日本古文書 幕末外国関係文書』五十五出版準備。

各教員が実施した調査活動については、史料探訪の項を参照願いたい。

共同利用・共同研究拠点、特定共同研究、近世史料領域課題「近世大名家臣家史料の「読み直し」と研究資源化」（研究代表者・小宮木代良）を推進した。また、「維新史料研究国際ハブ拠点形成プロジェクト」（研究代表者・

小野将）では、「維新史料綱要データベース」の英訳・グロッサリー研究、維新関係史料のデジタルアーカイブ化、海外研究者との国際的な研究ネットワーク（ハブ拠点）構築の取り組みを続け、二〇二三年一月一日、本所・同プロジェクト主催、JSPS人文科学・社会科学データインフラストラクチャー構築推進事業、JSPS科研費20H00023、同22H00692の共催により、国際研究集会「維新史料研究と国際発信」をオンラインで開催した（報告者二名、コメンテーター二名、参加三七名）。

教員等が研究代表者となり、科学研究費補助金を得て進めた研究には、以下のものがある。基盤研究(A)「在外日本関係史料の調査と貴重史料の研究資源化による維新史料研究国際ハブ拠点の形成」（研究代表者・保谷徹）二〇二〇―二〇二三年度、若手研究「日本近世における政教関係の形成と確立」（研究代表者・林晃弘）二〇二二―二〇二四年度、基盤研究(B)「近世書状史料群の研究と歴史情報資源化」（研究代表者・松澤克行）二〇二二―二〇二五年度、基盤研究(B)「日本近世史料学の再構築―基幹史料集の多角的利用環境形成と社会連携を通じて」（研究代表者・杉本史子）二〇二二―二〇二四年度、基盤研究(C)「徳川政権による公儀の確立と城郭建設―無年号文書から公儀普請を読み解く―」（研究代表者・及川亘）二〇二二―二〇二四年度、基盤研究(C)「預人の政治的分析による近世中期幕藩国家政治構造の研究」（研究代表者・荒木裕行）二〇二二―二〇二四年度、基盤研究(B)「維新政府による朝廷・幕府・諸藩を源流とした文書行政の解明と関連史料群の学術資源化」（研究代表者・箱石大）二〇二二―二〇二七年度、基盤研究(C)「近世初期大名発給無年号文書群の研究資源化」（研究代表者・小宮木代良）二〇二二―二〇二五年度。

また、部門独自の社会連携活動として公益財団法人徳川記念財団が主催する古文書講座に講師を派遣した。

他にも地震・火山史料の調査・研究など所内外の各種共同研究プロジェクトに部門教員が参加している。それらについては、本『所報』各項のほか、『東京大学史料編纂所研究紀要』、『東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター通信』、東京大学および東京大学史料編纂所のウェブサイトで掲載記事等も併せて参照願いたい。

古文書・古記録部門

二〇二三年度、古文書室では四書目（東寺百合文書・大徳寺文書別集徳禪寺文書・東大寺文書・醍醐寺文書）、古記録室では五書目（中右記・平記・実躬卿記・薩戒記・後法興院関白記）の編纂を行った。また、古文書室では『大日本古文書 家わけ第十 東寺文書之十九』、『大日本古文書 家わけ第十八 東大寺文書之二十五』を、古記録室では『大日本古記録 薩戒記 七』を刊行した。出版物の概要については、「出版報告」の項を参照されたい。

編纂各書目については、原史料の詳細な観察によって定本的テキストを作成する、あるいは様々な種類の写本を比較検討し、より良質で完成度の高い原形態の復元を果たすという方針のもとに、史料調査・採訪などを行った。主な調査先は、京都府立京都学・歴史館、大徳寺塔頭徳禪寺、東大寺図書館、醍醐寺、西大寺、陽明文庫、国立歴史民俗博物館、杏雨書屋、宮内庁書陵部、国立公文書館、尊経閣文庫などであった。

部門構成員は、各人の研究・編纂との関連に応じて研究プロジェクトを組織し、参加している。科学研究費補助金による研究で、部門構成員が代表者として統轄しているおもな共同研究には、「デジタル技術による金石文史料の研究資源化と学融合的歴史叙述への応用研究」（基盤研究(A)、代表者菊地大樹、二〇一九～二三年度）、「荘園絵図調査・解析方法に関する総括的研究と汎用的な歴史地理情報への応用研究」（基盤研究(A)、代表者井上聡、二〇二二～二〇二六年度）がある。各研究は、それぞれの課題とする史料の研究資源化をはかりながら、あらたな歴史叙述を模索しての研究を進めている。当部門と密接に関わるデータベースに、古文書フルテキストデータベースと、古記録フルテキストデータベースがある。古記録フルテキストでは、『大日本古記録 言経卿記 七・八』、『賀茂伝奏経元記』（『東京大学史料編纂所研究成果報告二〇二〇―三 賀茂別雷神社の所領と氏人』）のデータ作成・公開を行った。

その他の諸活動については、「史料研究・成果公開」「所員研究活動」の各項を参照されたい。

特殊史料部門

特殊史料第一室は、兼任室員のもとで「花押かがみ」編纂に関する準備作業を行っている。編年各室で作成された「花押彙纂」のデータベース化については、前年度までに引き続き、画像史料解析センターの「花押彙纂等の花押画像データベース統合化プロジェクト」に参加して行っている。なお、同プロジェクトの遂行には、科学研究費基盤研究(A)「筆跡・花押情報の高度利活用研究―収集スキームの錬成と関連歴史情報との統合による」(研究代表者末柄豊氏) および奨学寄附金(故・林譲氏)からの支援を受けた。

海外史料第一室は、二〇二四年度刊行に向けて「日本関係海外史料 イエズス会日本書翰集」原譯文編之六の原稿準備と共に、後続巻に取載する予定の原稿整理を行った。現在編纂担当者は一名であるが、今後も三年に一冊原譯文編の刊行を維持していく予定である。所内のプロジェクトとしては「在外日本関係史料の調査と貴重史料の研究資源化による維新史料研究国際ハブ拠点の形成(代表者保谷徹)」において、明治初期に日本をユーラシア大陸陸路で訪問したイタリヤ人貴族の旅行記翻訳のマネージメントを行った。また特定共同研究「本所所蔵在外日本関係史料の多角的利用のための翻訳研究」に参加し、二六世紀のポルトガル人のアジア進出に関する文献の翻訳を行った。

海外史料第二室は、『日本関係海外史料 オランダ商館長日記』訳文編之一三(下)を出版した。また、同書原文編之一四(二〇二六年度出版)以降の東京大学機関リポジトリを経由したオンライン公開に向けて、本所前近代日本史情報国際センター、東京大学出版会、東京大学総合図書館、東京大学情報基盤課学術情報チームとの協議を行った。併せて、既刊分オンライン公開のため、既刊分PDFの冊毎のファイル連結とOCR化を進めた。協議と作業の経過については、年度末研究者集会を利用して所内で共有した。さらに、将来の編纂・出版の準備のため、オランダ商館長日記の原本校訂作業を進め、一六五九年、一六六〇年度分を完了するとともに、原文編之一四に附録として採録予定の一六五三年一月二四日付日本商館発信書翰(日本商館文書一八六号NU-HanNa/1.0421/286)を翻刻した(ともに久礼克季氏による)。

なお、日本学士院UAI関連事業「在外未刊行日本関係史料」の一環として、二〇二三年一〇〜十一月インドネシアに大東敬典を、同一〇月オランダに橋本真吾を派遣し、それぞれオランダ東インド会社契約集(Contractboek)の調査、一九世紀オランダの世界地理書に関する調査を行った。

中世禅籍史料研究プロジェクトでは、本所所蔵「天塚和尚語録」および「春林宗俣和尚等法語」の翻刻と電子データ化を進めた。二〇二四年度に公開する予定である。

画像史料解析センター

1 構成

二〇二三年度のセンタースタッフは、第一分野(絵画史料)が高橋慎一郎教授(センター長)、藤原重雄准教授、堀川康史准教授、第二分野(画像史料)が菊地大樹教授、岡本真准教授、第三分野(古文書画像)が荒木裕行准教授の六名であった。また、堀本一繁氏(福岡市博物館)に客員教授を委嘱した。運営委員会は、上記のセンタースタッフ六名に、黒嶋敏准教授(運営委員長)、新井重行准教授、小塩慶助教、立石了助教の四名を加えた、一〇名で構成した。

2 研究プロジェクト

二〇二三年度は、下記の一六件のプロジェクトを立ち上げ、研究を行った。各プロジェクトのメンバーと活動の概要は以下の通りである。

【第一分野(絵画史料)】

① 正倉院宝物図プロジェクト

(メンバー) 稲田奈津子(代表者) 新井重行 藤原重雄 山口英男

〔活動の内容〕「正倉院御物帳」および本所保管史料の撮影/東京国立博物館所蔵資料の調査/大阪府立中之島図書館・奈良県立図書情報館での正倉院宝物図関係史料の調査/橋本家所蔵「森川杜園関係資料」の翻刻/国立歴史民俗博物館企画展示「いにしえが、好きっ!」近世好古図録の文化誌―(二〇二三年三月〜五月)への研究協力

② 長篠合戦図屏風プロジェクト―長篠合戦図屏風模写のための近世狩野派絵画および合戦図屏風の比較研究―

(メンバー) 金子拓(代表者) 黒嶋敏 須田牧子 村岡ゆかり 薄田大輔(共同研究員、徳川美術館) 白水正(同、犬山城白帝文庫) 津田卓子(同、名古屋博物館) 原史彦(同、名古屋城調査研究センター) 阪野智啓(同、愛知県立芸術大学) 藤本正行(同) 三宅秀和(同、群馬県立女子大学)

〔活動の内容〕本所史料保存技術室で進行中の模写についての意見交換

③ 琉球諸島絵図プロジェクト―個人蔵「琉球諸島絵図」プロジェクト―

(メンバー) 黒嶋敏(代表者) 須田牧子 畑山周平 渡辺美季(共同研究員、本学大学院総合文化研究科)

〔活動の内容〕個人蔵「琉球諸島絵図」の記載文字入力と公開準備

④ 「荘園絵図聚影」釈文編・中世出版プロジェクト

(メンバー) 藤原重雄(代表者) 稲田奈津子 井上聡 遠藤基郎 及川亘 川本慎自 菊地大樹 末柄豊 高橋慎一郎 高山さやか 谷昭佳 鶴田啓

前川祐一郎 村井祐樹 村岡ゆかり 山口英男 山家浩樹 堀本一繁(客員教授) 榎原雅治(共同研究員、本学名誉教授) 高橋敏子(本所元教授)

〔活動の内容〕「日本荘園絵図聚影」釈文編四(中世三・古代補遺)の編集・校正・出版

⑤ 中近世肖像画研究プロジェクト

(メンバー) 藤原重雄(代表者) 西田友広 松澤克行 太田まり子(学術専門職員) 高岸輝(共同研究員、本学大学院人文社会学系研究科) 藤井恵介(同、本学名誉教授)

〔活動の内容〕法雲院所蔵の鳥丸家肖像画の追加調査/京都御所東山御文庫・聖護院・京都大学総合博物館の所蔵史料の調査/歴史絵引データベースにキャプション検索用データを新規作成・登録/国立歴史民俗博物館企画展示「いにしえが、好きっ!」近世好古図録の文化誌―(二〇二三年三月〜五月)への研究協力/未整理模写の調査・修補

⑥ 近世都市図解析プロジェクト

(メンバー) 山口和夫(代表者) 及川亘 藤原重雄 杉森哲也(共同研究員、放送大学) 西山剛(同、京都府京都文化博物館)

〔活動の内容〕オンライン研究会を開催（二〇二三年一〇月六日）／第二回
藝能史研究会東京特別集会シンポジウム「芸能史研究からの絵画史料論再
考」にて、西山・藤原が報告

【第二分野（画像史料）】

①近世・近代摺物画像プロジェクト

〔メンバー〕荒木裕行（代表者） 吉田ますみ（共同研究員、三井文庫）

〔活動の内容〕三井文庫所蔵近世・近代摺物のデジタル撮影

②古写真研究プロジェクト―高精細デジタル画像解析を基軸とした幕末明治
初期写真史料の研究資源化推進プロジェクト―

〔メンバー〕箱石大（代表者） 桑田恵里 高山さやか 谷昭佳 遠藤栄子

〔共同研究員、東京国立博物館〕 高橋則英（同、日本大学）

〔活動の内容〕横浜開港資料館にて木村芥舟関係古写真調査撮影／伊賀市
上野図書館にて上野城関係古写真調査撮影／海の見える杜美術館にて同館
所蔵古写真コレクションの調査撮影／一関市博物館、もりおか歴史文化館
にて岩手県内所在古写真関係史料の調査撮影／柳川古文書館にて曾我祐準
関係古写真の調査撮影／塩谷定好写真記念館、鳥取県立公文書館、鳥取市
歴史博物館にて鳥取県下所在古写真調査／鹿児島県下所在古写真コレク
ションの調査撮影／アメリカナショナルギャラリー、アメリカ国立公文書
館、ウィンターサー美術館、メトロポリタン美術館にてアメリカ所在幕末
明治初期日本関係古写真調査および写真コンサベーションラボ見学／谷昭
佳「オーストリアⅡハンガリー帝国東アジア遠征隊古写真資料集の編纂」

『学術会議叢書』一 第七回東亜細亞史料研究編纂機関国際学術会議 東ア
ジア歴史資料編纂の伝統と現代化」大韓民国国史編纂委員会、二〇二三年
五月／谷昭佳「失われた技法「写真油絵」の復元的研究―紙盤二製スル法
の再現―」『東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター通信』一〇一、
二〇二三年七月／谷昭佳「中嶋待乳関係古写真調査の概要―海の見える杜
美術館所蔵コレクション―」『東京大学史料編纂所附属画像史料解析セン
ター通信』一〇二、二〇二三年十月

③戊辰戦争期摺物画像研究プロジェクト―幕末維新期の諸藩出版物と板木・
木活字の研究―

〔メンバー〕箱石大（代表者）

〔活動の内容〕福島県立博物館寄託史料の調査／山口県文書館所蔵の長州
藩版板木・木活字及び関連史料の追加調査／箱石大「山口県文書館所蔵の
長州藩版板木・木活字」『東京大学史料編纂所附属画像史料解析センタ
ー通信』一〇三、二〇二四年一月

【第三分野（古文書画像）】

①電子くずし字字典データベース開発プロジェクト

〔メンバー〕井上聡（代表者） 新井重行 稲田奈津子 遠藤珠紀 小宮木
代良 松澤克行 宮崎肇（特任研究員） 川上一（共同研究員、国文学研
究資料館）

〔活動の内容〕くずし字データの切り出しと「電子くずし字字典データベ
ース」へのデータ登録（二七四〇三件）／データベース入力校正機能の改修

②本所所蔵台紙付写真・ガラス乾板に関する研究プロジェクト

〔メンバー〕井上聡（代表者） 新井重行 桑田恵里 高山さやか 谷昭佳
箱石大 藤原重雄

〔活動の内容〕ガラス乾板の保全とコンディショニングレポートの作成／所外所
在ガラス板写真の調査／国立歴史民俗博物館企画展示「いにしえが、好
きっ！―近世好古図録の文化誌―」（二〇二三年三月～五月）への研究協力

③花押彙纂等の花押画像データベース統合化プロジェクト

〔メンバー〕川本慎自（代表者） 井上聡 宮崎肇（特任研究員） 戸谷穂
高（共同研究員、日本大学非常勤講師）

〔活動の内容〕「花押データベース」への花押カード・花押彙纂データ（三
〇四九五件）ならびに新花押データ（二〇二二件）の登録／花押カードデー
タを対象としたサムネイル画像の生成／奈良文化財研究所・滋賀大学デー
タサイエンス学部などとの研究協力

④金石文拓本史料の整理と公開

〔メンバー〕菊地大樹（代表者） 稲田奈津子 井上聡 金子拓 川本慎自
高橋慎一郎 藤原重雄 村山卓（共同研究員、埼玉県埋蔵文化財調査事業
団）

〔活動の内容〕収集した拓本の裏打ちと撮影・デジタル化の準備／金石文

データベースの公開準備／金石文史料の調査と拓本採集（和歌山県高野町 高野山町石・宮城県石巻市など）

⑤ 大迫物関係資料研究プロジェクト

〔メンバー〕 高橋慎一郎（代表者） 小瀬玄士 畑山周平 林晃弘
〔活動の内容〕 本所所蔵『島津家文書』のうち「大迫物行列図」・「流鏑絵巻」の原本調査・写真撮影／鹿児島歴史・美術センター黎明館にて『国分家資料』の調査・撮影／醍醐寺にて武家故実家小笠原氏関係資料の調査

⑥ 中世花押の編年研究プロジェクト—今川了俊花押の収集と編年研究—

〔メンバー〕 堀川康史（代表者） 井上聡 西田友広 林遼
〔活動の内容〕 文書目録の増補・修正作業／福岡大学所蔵土居蒐集文書の調査・撮影／花押の切取・メタデータ付与作業（七三八件）／鹿児島県歴史・美術センター黎明館の特別展『南北朝の動乱と南九州の武士たち』（二〇二三年九月～十一月）への研究協力

⑦ 外交文書研究プロジェクト—足利義満宛永楽帝勅諭の復原的研究—

〔メンバー〕 岡本真（代表者） 須田牧子
〔活動の内容〕 松浦史料博物館にて所蔵史料の調査・撮影／古河歴史博物館にて所蔵史料の調査／岡本真・須田牧子「永楽五年付足利義満宛永楽帝勅諭諸本について」『東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター通信』一〇三、二〇二四年一月

3 研究集会・展示など

研究プロジェクトの研究成果を反映したものととして各博物館などでの展示が開催されたほか、二〇二二年度の琉球諸島図プロジェクトの研究成果を反映した「都城島津邸所蔵「琉球并諸島図」デジタルアーカイブ」が公開され、これを報告する記者発表を二〇二三年九月二〇日に宮崎県都城市において実施した。

4 センター通信

二〇二三年度は、次の四冊を発行した。
第一〇〇号 二〇二三年四月発行 三六頁 東京大学所蔵の二つの「プロ

ムホフ家族図」（松井洋子・高島晶彦）ほか

第一〇一号 二〇二三年七月発行 二四頁 失われた技法「写真油絵」の復元的研究—紙盤二製スル法の再現—（谷昭佳）ほか

第一〇二号 二〇二三年一〇月発行 二四頁 「熊野懐紙」「熊野類懐紙」の模写・摸刻—國學院大學図書館所蔵「久我家文書」および国立歴史民俗博物館所蔵「聆涛閣集古帖」所収史料について—（太田克也）／東京大学史料編纂所蔵「近藤重蔵本蒙古襲来絵詞摸本」（堀本一繁）ほか

第一〇三号 二〇二四年一月 二四頁 『晴富宿彌記』紙背文書にみえる「洛中図」—洛中洛外図研究と史料の読み直し—（藤原重雄）ほか

なお、センター通信は、これまで年間四号の頻度で発行を続けてきたが、二〇二四年度より年間三号の発行に変更する予定である。

前近代日本史情報国際センター

本センターは、史料情報集約化ユニット・史料情報資源化ユニット・歴史知識高度利用化ユニットの三つのユニットを設けて歴史情報学研究を推進している。また二〇二〇年度より、史料情報資源化ユニットのもとに原本史料情報資源化ミニユニットを置いている。多様な課題に対応するため、ユニット間で連携し、また他の研究グループとの協業で研究を進めている。二〇二一年九月より劉冠偉特任研究員がメンバーに加わっている。

1 JSPS人文科学・社会科学データインフラストラクチャー強化事業

本事業は、昨年度末に終了したJSPS「人文科学・社会科学データインフラストラクチャー構築推進事業」の成果等を踏まえ、人文科学・社会科学のデータ共有、利活用を促進するデータプラットフォーム等の基盤のさらなる充実・強化を図り、研究者がともにデータを共有しあい、国内外の共同研究等を促進することを旨とするものである。二〇二三年九月に、本所は社会科学研究所とともに、本事業を担う中核機関・東京大学として採択された（事業期間は二〇二三年一〇月～二〇二八年三月）。前事業に引き続き情報センターを中心として進めていく。本事業では、取組A・J D C a t（国立情報学研究所

〈NII〉が構築した人文学・社会科学総合データカタログ)との連携、取組イ・他機関のデータ受入や受託、取組ウ・データ活用の促進、取組エ・JDCatの運用・改修、メタデータスキーマや統制語彙の妥当性に係る継続的な検討等、取組オ・「データ共有のための手引き」の妥当性に係る継続的な検討等、取組カ・拠点機関との連携及び関係機関との調整という六本の柱が設定されている。二〇二三年度は以下について取り組んだ。

・中核機関運営委員会の開催(毎月)・長期計画に関する持続的かつ円滑なコミュニケーションを維持し、事案の発生に対しても柔軟かつ迅速に対応するために、人文学・社会科学が緊密な連携を組んで、管理能力を発揮する体制として整備・実施した。委員長は史料編纂所所長、副委員長は社会科学研究所所長。

・実務者ミーティングの開催(二〇二三年一月二〇日、二〇二四年三月一日)・中核機関、拠点機関等の実務担当者が出席し、JDCat連携にあたっての問題点の洗い出しやシステム改修の検討、「データ共有のための手引き」の妥当性にかかる検討など、各取組についての進捗報告や情報交換を行った。

・人文学・社会科学データインフラストラクチャー強化事業フォーラム「データ共有・利活用促進のための研究基盤」の開催(二〇二四年三月一日)。
・人文学データシンポジウム「人文学研究資源としてのデジタルデータ」の開催(二〇二四年三月二二日)。
・「島津家本」のうち、画像のあるものについて、JDCat登録のための検討を行った。

・神奈川県立金沢文庫所蔵「金沢文庫文書」について、JDCatへのデータ追加・更新を行った。

・水上たかね助教の協力のもと、Herman J. Moeshart氏提供の「オランダ国立文書館所蔵幕末・明治期日蘭関係史料目録データセット」をHLabから公開した(二〇二三年一月一日)。
・構築推進事業の取組・成果に関して、国際会議DH2023(二〇二三年七月一〇(一四日))にて報告・広報した。
・保谷徹名誉教授の協力のもと、和歌山県湯浅町所蔵「紀州菊池本家・新家

史料」をHiCAT Plusより公開した(二〇二三年五月一〇日)。
・取組イおよび取組オに関連して、金甫榮共同研究員とともに、「史料画像デジタル化進捗管理システム」を事例に、OAIIS参照モデル(史料画像などデジタルデータの長期保存に関する国際標準)に準拠するためのシステム要件や情報設計、ワークフローなどについて検討した。

2 「データ駆動型歴史情報研究基盤の構築」プロジェクト

二〇二一年四月よりFSI事業として開始した。同事業の運用方針の変更により、予算措置は二〇二一年度限りとなったが、研究PJとしては継続し、二〇二二年度以降は歴史知識高度利用化ユニットのもとで進めている。二〇二三年度の具体的な成果は下記のとおりである。

・くずし字自動解読の試み・昨年度に引き続き、版面画像および手書き史料画像を対象に、AI・機械学習の手法を用いて、文字の自動解読に取り組み、性能を向上すべくチューニング等を進めている。

・都城島津邸所蔵「琉球并諸島図」デジタルアーカイブの公開・画像史料解析センター「琉球諸島図」プロジェクト(研究代表者・黒嶋敏准教授)等と連携し、都城島津邸所蔵「琉球并諸島図」についてWeb上での画像閲覧とともに、絵図に描きこまれた地名等の情報の分析も可能なシステムを構築した(二〇二三年九月二〇日公開)。

・二〇二三年三月公開のHLab(情報サービス・データセットを中心とした機能や要素を実験的に公開するサイト)の本運用を開始した。

3 原本情報資源化ミニユニット

昨年度に引き続き、史料情報資源化ユニットのもとに原本情報資源化ミニユニットを置いた。島津家文書のプロジェクトなど、多様な財源で進行している原本情報に関わる各種プロジェクトの結節点として機能する(財源は提供しない)。今年度は、共同利用・共同研究拠点一般共同研究四件、JSPS科研費計四件、大学共同利用機関法人高エネルギー加速器研究機構令和四年度加速器科学総合育成事業「和紙を科学する」(研究代表者・高島晶彦)、AI等の活用を推進する研究データエコシステム構築事業」にかかるユ一

スケース創出課題「異分野共創による史料学DXの確立」(提案代表者:尾上陽介)と連携し、上杉博物館所蔵上杉文書や松尾大社所蔵史料の調査など、六件の原本史料調査・分析を行った。

4 情報基盤整備

・全学無線LAN整備:上記の達成のために、SHIPSにおけるネットワークシステムの改修が必須となったことから、認証方式やネットワーク再構築に着手した。

・ストレージ導入:JSSPS科研費10302655(研究代表者:金子拓教授)との共同により、「画像格納用ストレージ(138TB)」を導入した。

5 本所出版物のデータ搭載

下記を対象として版面画像の登録を行なった。

『大日本史料 第六編之五十二』、『大日本史料 第七編之三十五』、『大日本古文书 島津家文書之七』、『大日本古文书 幕末外国関係文書之五十四』、『大日本古記録 陽明文庫本勘例 下』、『大日本古記録 実躬卿記 十』、『大日本近世史料 細川家史料 二十八』、『日本関係海外史料 オランダ商館長日記 訳文編之十三上』、『正倉院文書目録 九』

また、二〇二二年度・二〇二三年度の本所刊行物のうち、古文書フルテキストデータベース・大日本史料総合データベース・近世史編纂支援データベースに本文を搭載する書目について、それぞれのXMLデータの確認を行い搭載した。確認・搭載したのは次の書目である。

『大日本古文书 東大寺文書之二十五』、『大日本古文书 徳禪寺文書之二』、『大日本古文书 島津家文書之七』、『大日本史料 第六編之五十一』、『大日本史料 第七編之三十五』、『大日本史料 第十二編之六十三』、『大日本近世史料 細川家史料二十八』

6 Hi-CAT Plusの目録整備

・前年度に引き続き、図書部史料情報管理チームの協力の下、目録室の学術専門職員により、西暦架・マイクロ架の目録作成(冊)と登録をすすめた。

「賀茂別雷神社座田家文書 マイクロフィルム版」「青蓮院吉水蔵聖教」「岩倉具視関係史料(カラー版)」など三二件を新規登録し、「唐通事会所日録」など四三五件について目録修正した。

・図書部史料情報管理チームにより、ポーンデジタルの仮目録新規二五二件(所内非公開も含む、昨年度二一九件)、および一点目録新規三件(昨年度六件)が登録された。また、一点目録の仮目録からの差替九七件、仮目録の修正三六三件、一点目録の修正二二件を行った。

共同利用・共同研究拠点

二〇一〇年度より開始された「日本史料の研究資源化に関する研究拠点」は、二〇二三年度より第三期の二年目を迎えることとなった。

拠点の研究活動には、拠点が設定した課題について所外に広く共同研究者を公募する特定共同研究と、所外の研究者グループに対し研究課題の公募を行う一般共同研究の二つの区分があり、各課題は東京大学史料編纂所協議会での審議を経て採択決定されている。本年度の協議会は、二〇二三年九月四日・二〇二四年三月九日の二回開催した。二〇二〇年度以降、新型コロナウイルス感染症のため、協議会はオンラインで開催してきたが、コロナウイルスが五類へ移行されたことを受け、今年度は三年ぶりに対面で開催できることになった。

二〇二三年度の特定共同研究は、①古代史料領域「奈良平安時代の大規模写経群形成に関する史料学研究―小川八幡神社大般若経を核として」(二〇二二―二〇二三年度)、②中世史料領域「賀茂別雷神社文書・社家文書の調査・研究」(二〇二二―二〇二四年度)、③近世史料領域「近世大名家臣家史料の「読み直し」と研究資源化」(二〇二三―二〇二四年度)、④海外史料領域「本所所蔵在外日本関係史料の多角的利用のための翻訳研究」(二〇二二―二〇二五年度)、⑤複合史料領域「荘園絵図調査方法論の高度化と調査関連情報学の学術資源化に関する研究」(二〇二二―二〇二四年度)の五件であり、延べ人数にて五八名の所外研究者と、二三名の所内研究者が参加した。また、一般共同研究は二四件の課題を採択し、延べ人数にて二二名の所外研究者

と、六二名の所内研究者が参加した。

本拠点共同研究では、大学や国立の研究機関のみならず、地方自治体の教育委員会・史料館・博物館・資料館をはじめ、民間の研究機関や史料原本を所蔵している寺社や文庫などと連携して広く史料情報の収集・公開・研究を進めている。これにより多種多様な日本史料の研究資源化を果たし、当該分野の研究の発展に資することを目的としている。二〇二三年度は、宮城・秋田・山形・福島・茨城・埼玉・東京・神奈川・長野・富山・滋賀・京都・大阪・奈良・和歌山・兵庫・福岡・大分・佐賀・長崎・熊本の各都府県、および韓国・オランダなどにて、史料の調査・蒐集を行った。

その成果については、対面やオンラインで国際研究会・シンポジウム・研究会等を開催して研究報告をしたほか、書籍として萩原大輔『中近世移行期 越中政治史研究』（岩田書院、二〇二三年四月）、萩原大輔編『シリーズ・織豊大名の研究II 佐々成政』（戎光祥出版、二〇二三年八月）、長村祥知『対決の東国史I 源頼朝と木曾義仲』（吉川弘文館、二〇二三年八月）、黄霄龍・堀川康史編『海外の日本中世史研究「日本史」・自国史・外国史の交差』（勉誠社、二〇二三年一月）、金子拓『長篠合戦 鉄砲戦の虚像と実像』（中公新書、中央公論新社、二〇二三年二月）や（終了分課題も含む）、『東京大学史料編纂所研究成果報告』四冊を刊行した。

また、博物館等展示では、企画展「近世天皇家の舍利信仰」（二〇二三年三月二十八日～二月二十四日、泉涌寺宝物館心照殿）、企画展「泉涌寺と女官」（二〇二三年四月二十五日～二〇二四年三月二十四日、泉涌寺宝物館心照殿）、静嘉堂文庫美術館企画展「あの世の探検―地獄の十王勢ぞろい―」（二〇二三年八月一日～九月二十四日、静嘉堂文庫美術館）、企画展「国宝多宝塔造立八〇〇年記念 高野山金剛三昧院―鎌倉殿を串つた寺院の軌跡―」（二〇二三年九月二十五日～二月二日、鎌倉歴史文化交流館）、企画展「江戸前期の泉涌寺と徳川政権」（二〇二三年九月二十六日～二月二十四日、泉涌寺宝物館心照殿）、企画展「俊祐律師と四条天皇・御遠忌による追福」（二〇二三年一月二十六日～二〇二四年四月二日、泉涌寺宝物館心照殿）、特別展「土方歳三資料館×肥後熊本藩」（二〇二四年一月一日～三月二十四日、熊本県立美術館）、企画展「読んでみよう！吉野の古文書」（二〇二四年三月六日～四

月八日、大淀町文化会館）、コレクションギャラリー展示「新史料発見 三木合戦と羽柴秀吉」（二〇二四年四月六日～七月七日、兵庫県立歴史博物館）、特別展「松尾大社展 みやこの西の守護神」（二〇二四年四月二七日～六月二三日、京都府京都文化博物館）、特別展「松尾大社～みやこの西の守護神～」（二〇二四年七月二〇日～九月一六日開催予定、鳥取市歴史博物館）に協力をし、展示や図録などを通じて拠点研究の成果を学界・社会に発信・還元した。

なお、今年度は拠点の研究成果として、「日本用語翻訳グロッサリー・データベース」(<https://www.hin.tokyo.ac.jp/collection/digitalgallery/glossary/>)が、本所ホームページにて公開されている（二〇二三年八月）。

このほかの各共同研究課題の内容および成果の概要は、本誌「史料研究・成果公開」の「共同利用・共同研究拠点による研究・成果」の項を参照されたい。デジタル撮影による史料画像データの所在状況や、目録データは、本所データベースの「所蔵史料目録」[Hi-CAT Plus]「日本古文書ユニオンカタログ」等にて公開している。史料画像については本所図書館閲覧室内の端末にて閲覧に供している。

なお、本拠点に関して、課題の概要、公募（課題・共同研究員）、研究会等の催しの案内、成果物の刊行など、随時本所ホームページ・ツイッターにて発信している。トップページの「News & Topics」欄、または「共同利用・共同研究拠点」のページも参照されたい。

IR・広報室

史料研究の成果を広く公開・発信することは編纂所の重要な目的・特徴のひとつであり、この機能を強化する必要がある。近年一段と求められるようになってきた。そのため、二〇一九年四月に「IR・広報室」を設置し、三名の室員を配置している（平澤加奈子・IR・広報担当、Schweinsberg Alexandra・国際発信担当、三島暁子・編集担当、糸賀優理・IR・編集担当）。各担当の役割および二〇二三年度の業務詳細については以下の通りである。（IR・広報担当）東京大学認定シニアURAとして、拠点研究活動の諸指

標に基づく点検・評価を日常的に実施した。また、JSPS科学研究費補助金など、外部資金の獲得に向けた説明会を開催するなど、研究経費の多様化や研究環境整備に積極的に取り組み、研究活動の支援体制の強化を図った。本所の研究活動を広く発信することを目的として、二〇二四年二月一日・一六日に東京大学ニューヨーク・オフィス(UTokyoNY)イベント「日本の歴史を伝え、つなぐ―東京大学史料編纂所のこれまでとこれから」を開催し、現地・オンラインを含めて一五八名の参加があった。

また、全学のURANETワーク(UTRA)やふちけんWG・研究データマネジメントWGなど、全学の認定URANETワーク内においても積極的に活動を行った。本学が二〇二二年一月より幹事校として参加している人文・社会科学系URANETワーク(JINSHA)では、二〇二四年三月七日・八日に東京大学で開催された「第9回人文・社会科学系研究推進フォーラムJINSHA kaleidoscope―人系研究のコアバリューを引き出す研究支援のあり方とは」の主担当URANETとして活動した。そのほか、通年で関与している業務としては次のとおり。

概算要求対応／学内第二次配分対応／共同利用・共同研究拠点二〇二二年度実施状況報告書作成作業・同中間評価資料作成作業／外部資金獲得に向けた研究会開催／外部資金情報収集・提供／外部資金申請サポート／Researchmap代理登録作業／JSPS人文・社会科学データインフラストラクチャー強化事業(以下データインフラ)運営サポート／プレスリリース対応／本部広報記事作成作業／取材対応／オープンキャンパス所内担当／史料編纂所グッズ作成／UTCとの連携／本所広報関連問い合わせ対応
○会議等出席

(所内)研究会企画委員会／財務企画小委員会／情報センター運営委員会／データインフラ関連会議／東アジア史料研究編纂機関国際学術会議準備小委員会(所外)URANET連絡会議・ふちけんWG／部局広報事務担当者連絡会／研究データの管理・利活用に関する検討WG

(学外)文部科学省学術審議会各種部会・専門委員会(研究環境基盤・研究費・人文・社会科学特別委員会など)／JINSHAネットワーク関連研究会・シンポジウム／RUCコンソーシアム／RA協議会大会／内閣府科学技術政策

担当大臣等政務三役と総合科学技術・イノベーション会議有識者議員との会合〔国際発信担当〕各種広報の英文化につとめ、国際発信力の抜本的な強化を図った。

本所HP・X(旧Twitter)への英文作成・修正作業／本部提出書類の英文作成・修正作業

〔編集担当〕本所の年次発行物(東京大学史料編纂所所報・同研究紀要・同要覧)の編集を担当し、成果公開の円滑化を図った。

『東京大学史料編纂所要覧二〇二三年』(日本語版)／『東京大学史料編纂所所報』五八号／『史料編纂所研究紀要』三四号
○会議等出席

(所内)所報紀要委員会

〔IR・編集担当〕本所の年次発行物(東京大学史料編纂所要覧)の編集を担当するとともに、所内の研究業績収集業務にあたった。

『東京大学史料編纂所要覧二〇二三年』(日本語版)／Researchmap代理登録作業／評価資料作成時の研究業績収集

図書部

史料編纂所は史料研究・編纂を進めるために、明治初年から現在にいたるまで、国内外日本史関係史料の調査・蒐集を続けてきた。

寄贈・移管・購入等によって受け入れた原本史料・写本は、国宝一件、重要文化財二〇件を含め、二〇万点を超える。また、各地に所蔵される史料を調査し、筆写・撮影をはじめとするさまざまな方法で複製を作成して、書庫に蓄積してきた。各種複製史料の数も、一八万件に及ぶ。また、日本史を中心に歴史関係の研究書・地方史・雑誌類を蒐集している。蓄積された図書・史料は閲覧室で公開されている。

史料編纂所図書部は、1図書・史料の受入れと管理、2史料のデジタル化と画像公開、3所蔵史料の複製・掲載・放映申請及びその他の問合わせへの対応、4所蔵史料の展示のための貸出し(出陳)、5書庫及び閲覧室の管理などの業務によって、史料編纂所の研究事業および共同研究・共同利用拠点

としての機能を支える役割を果たしている。

二〇二三年度には新型コロナウイルス感染症による全学的な活動制限が撤廃されたことに伴い、閲覧室の利用について開室時間短縮の終了や閲覧予約枠の増加など、利用サービスの改善に努めた。来年度からは所外開室日を拡大し、ほぼコロナ前の状況に戻すこととなった。予約制は引き続き維持して所外からの入室予定者を事前に把握することで、より効率的な運営とサービスの向上を図っている。また、史料・図書の管理運用や複製申請への対応などの方法についても日常的に見直しを行い、整備に努めている。

史料画像のデジタル化促進とデータ公開拡張の重要性はますます大きくなってきている。図書部では「史料画像デジタル化進捗管理システム」を用いて、所蔵マイクロフィルムのスキャニング画像、所蔵史料及び採訪調査等による所外史料のデジタル撮影画像の番号付与からサーバーへの登録までの一貫した管理を担っており、マイクロフィルムのスキャニングや、東京大学デジタルアーカイブズ構築事業により、本所所蔵史料の新たな画像を所蔵史料目録データベースから公開している。

特に近年は、二〇一九年度から始まった人文学・社会科学データインフラストラクチャー構築推進事業と、その成果を踏まえて新たに展開される同強化事業、さらには大型科研等の活動により、史料画像のデジタル化とデータ公開が急速に進展しており、図書部の史料情報担当者が各種協議に参加し、研究部と密接に連携して方針や手順に関する情報を共有することに努めている。また、公開環境が急激に変化しつつある状況のなか、史料採訪にご協力いただいた所蔵者の個人情報に配慮し、その意向を尊重しつつ公開を進める新たな方策の運用が開始されつつある。

図書・史料現物の受入れと整理、蔵書の点検、閲覧室の環境維持、史料及び書庫の管理・保全などの業務にも細心の注意を払いながら取り組んでいる。未整理史料については整理を進め、燻蒸して配架している。各地の博物館等への出陳や、出版社・報道機関等からの掲載要請についても対応している。史料の管理保全に関しては、スキャニングや出陳と連動して、史料保存技術室と連携しつつ必要な修理・再装備・再配置等を行なっている。蔵書点検についても、日常業務と並行して柔軟な体制で必要な点検を実施している。

懸案である書庫の老朽化・狭隘化については、書架の配架状況や安全面の見直し、耐震対策の拡充などを継続的にを行い、さらなる改善を進めている。二〇二三年度には初めて本所所蔵史料を適切な他機関へ寄託し、貴重書庫狭隘化の緩和を図った。

現有の人的資源に限りがある一方、図書部に期待される業務は多様化しており、負担は過重となっている。効率化を進めつつ、業務内容の整理に努めている。史料編纂所図書部が果たす役割の重要性を研究者コミュニティおよび多様な利用者の方々に理解していただく努力を継続するとともに、所内での研究部・技術部・各センターとの連携をより緊密にし、課題を共有することが求められている。

以下、二〇二三年度の業務の遂行状況を述べることとする。

一 貴重書庫の温湿度管理

(一) 常時温湿度の監視を行い安定に努めている。特別資料庫（経済学研究科学術交流棟地下二階）は遠隔監視を行っている。

二 原本史料等の管理

(一) 未整理史料の整理を進めた。貴重書「富岡八幡宮及慶珊寺縁起」(〇一〇一―二)、「先徳巻数」(〇〇一四―一七)等二三点の整理が終了した。特殊蒐書「加納家史料」「神野志名誉教授寄贈史料」「後藤紀彦氏旧蔵コレクション」の整理が終了した。

(二) 二〇一七年度より継続して、修理・撮影が完了した「往復」(史料編纂所の史料収集記録)を特別資料庫に配架している。

(三) 新規受入史料・返却史料、寄託史料等の燻蒸を業者委託により実施した。

三 書庫内環境の整備、狭隘化対策

(一) 月に一回の書庫内環境整備・清掃を職員の手により実施している。

(二) 書庫一〜七層の空調機器(デシカ)は、不具合が発生する都度、業者に修理を依頼している。

(三) 九層の模写(軸装史料)を安全に保管するため、二〇二二年度に引き続き棚はめ込み箱を導入した。

(四) 耐震対策として、二〇一九年度から書庫内書架に落下防止シートを設置している。これまで三〜五層・七層の設置が済んでおり、二〇二三年

度は五層（書棚増加箇所）に設置した。
デジタル化への対応

(一) 本所所蔵史料の画像一三一五点（八六八〇三コマ）について、所蔵史料目録データベースから公開を行った。

(二) 東京大学デジタルアーカイブズ構築事業「島津家本」のデジタル化により、一六一点（二七一九四コマ）の撮影・画像公開を行った。二〇二四年度も継続する。

(三) 四〇〇〇番台写真類については、二〇一九年度作成の指針に則り、所外において業者委託撮影を行った。撮影画像二一九点（二〇〇六七コマ）は二〇二四年度に所蔵史料目録データベースから公開予定である。

(四) サーバー(Archub)への画像のアップロードおよび簡易検索目録の作成を行った。画像のアップロード件数は次の通り。

① 国内探訪マイクロスキニングデータ 三二フォルダ 二五七二〇コマ

② デジタル撮影データ 二六五フォルダ 八九七七九コマ

(五) 探訪調査のデジタル撮影データ(二四七件)をHiCAT Plusに登録した。

五 業務の見直しと事務改善および利用サービス向上への取り組み

(一) 新型コロナウイルス感染症への全学的な危機管理的対応が終了したことに伴い、一〇月から開室時間の短縮を廃止するとともに、所外の閲覧予約者数を増やし、予約開始日の前倒しを実施した。また、二〇二四年度からは所外開室日を週四日に拡大することとし、従来のようにあらかじめ年間の開室スケジュールを作成し、所内外に周知した。

(二) 新任者向けの案内も兼ねた、図書部ポータルサイトの図書室利用案内の整備や新入所員・研究員向けに配布する「図書室利用案内」(所内用)の改定を行った。

六 蔵書点検・図書資産実査の実施

(一) 四月一〇日(月)～一四日(金)の五日間実施した。事前作業は日常業務と並行して行った。

(二) リストとの照合点検は、書庫五層の特別参考図書、書庫六層の写本類(七〇〇〇架・IWA・TOKOROを除く)および書庫九層の貴重

書(〇架)について実施した。その他については、棚並びの点検、棚清掃を行った。

(三) 本年度の不明図書は〇冊である。

(四) 蔵書点検期間に書庫六層の洋書刊本、書庫五層の刊本(五〇〇〇架)、閲覧室の参考図書について図書資産の実査(一〇ヵ年計画の第一年度)を実施し、全ての図書資産を確認できた。

七 受贈・受託・寄託・借用・出陳関連業務

(一) 受贈 二件(百瀬今朝雄・Herman J. Moeshart)

(二) 寄託 新規一件(落合左平次道次背旗 中津市歴史博物館に寄託)

(三) 借用 一件(永青文庫)

(四) 出陳 一七件、八八点(国立アイヌ民族博物館ほか)

八 利用・申請件数

(一) 所外来室者数 一三七六名(うち当日利用者〇名) ※事前予約制のため、二〇二三年度は当日利用受付なし。

学内者延べ四一三名 学外者延べ九六三名

史料・図書請求回数延べ一四七九回

(二) 文献複写件数

学内三七八件 学外一〇四四件 計一四二二件 四三四〇四枚

(三) 申請件数

① 翻刻・復刻 四件 一六点

② 掲載(印刷物・AV資料) 二二五件 六四三点

③ 放映 二三九件 七八五点

④ 展示(パネル等) 三九件 七四点

⑤ インターネット公開 二〇一件 七一四点

⑥ 複製 一六五件 五五三点

(うち、デジタルデータでの提供 六三件 一七四点)

九 視察・見学者のための案内・展示業務

書庫見学者総数 三〇件 二七一名

一〇 展示の手伝い・記録保管

木展、オープンキャンパス展示は、新型コロナウイルス感染症対応のため、

昨年度と同様実施しなかった。

一 新型コロナウイルス感染症対応

(一) 閲覧体制および業務体制

・二〇二三年五月八日から本学の活動制限指針レベルが「レベルS」に移行したことに伴い、一〇月から開室時間を通常どおりとした。学外者の利用は引き続き週三日とした。

・一〇月以降も予約者数の上限を拡大した上で、完全予約制による閲覧を継続することにした。

・在宅勤務の併用、積極的な年次有給休暇取得。

(二) 感染拡大防止対策

・閲覧室入口、書庫内、図書事務室に消毒液設置。

・開室、閉室準備作業における閲覧室、書庫内消毒作業(六月以降省略)。

・閲覧カウンターに飛沫防止用パーテーション設置。

・閲覧席、閲覧用端末の減数、ソーシャルディスタンス確保。

・閲覧用端末、利用者用複写機にキーボード・タッチパネルカバー設置(六月に撤去)。

・閲覧室内、書庫内の筆記用具を撤去。

・一部の利用者サービスをオンライン化。

・事務室内の「三密」を避ける工夫(室内常時換気、事務室以外の作業スペース確保)。

史料保存技術室

史料保存技術室では、研究者と共に全国に散在する史料を調査・撮影し、歴史史料の複本作成や史料原本の保存修理に関する業務をおこなっている。

これらの業務については、修理・模写・影写・写真それぞれの担当者から年度当初に活動計画が技術部運営委員会に提出され、委員会での検討の後に技術部長より教授会で報告された。

活動の詳細は、以下の通りである。

〈修理〉

○修理

蜷川新右衛門親元自筆書状(貴〇二―二六)

入来院文書 三卷

後七日記

風聴書認(大武秀斎関係文書)

薩戒記抜書

田染文書

湯原文書 九卷

松尾大社所蔵文書(池田庄立券文) 一卷

永青文庫所蔵「信長公御状写」

朝鮮国両王子并三臣誓約書(模写)

細川幽斎画像(模写)

織田信長画像(模写)

○裏打

加納家史料

拓本

往復 徳禪寺下張り文書

正倉院御物

吉村文書(影写本)

○製本

本草綱目

往復

○手当

松平昭休往復書簡留

百首詠草断簡

外務省引継書類

○料紙調査

兵庫県多可町杉原紙研究所蔵寿岳文章和紙コレクション

一点

一点

一点

一点

一点

一点

九点

一点

島津家文書「歴代亀鑑」

小川八幡神社大般若経

上杉家文書

○その他

修理監督（島津家文書「歴代亀鑑」「宝鑑」・明国笏付・蔣州咨文）

（高島晶彦・山口悟史）

〈模写〉

○模写

「東京国立博物館所蔵長篠合戦図屏風」

色指定（補填）・礮水引き・貼りこみ

下描き 第一幅 第二幅

○図案制作

二〇二四年度要覧和文表紙

一点
（村岡ゆかり）

〈影写〉

○影写

中院一品記 卷二 紙背文書

○筆跡調査

中院一品記

島津家文書「歴代亀鑑」「宝鑑」

上杉家文書（米沢市上杉博物館）

小川八幡神社大般若経（和歌山県立博物館）

菅浦文書（滋賀大学経済学部）

善通寺所蔵聖教（善通寺宝物館）

尾崎享子氏所蔵手鑑（群馬県立歴史博物館）

○画像センタープロジェクト

電子くずし字字典データベース開発プロジェクトにおける、くずし字代

表字形の抽出作業および切り出し画像等の監修 三〇四五四件

花押纂彙等の花押画像データベース統合化プロジェクトにおける、花押
画像データの集積作業および切り出し画像等の監修 三一〇六四件

○その他

〈墨書業務〉

題箋・内題・奥書・扉書等

五点
（宮崎肇）

〈写真〉

○デジタル画像 撮影・現像 等

歴代亀鑑 宝鑑 薩摩国伊作庄日置北郷下地中分絵図 醍醐寺文書 岩

倉具視関係史料 東鑑 本所所蔵貴重書 他

撮影数 九四一七カット

画像処理数 一一五五〇五カット

（谷昭佳・高山さやか・桑田恵里）

①史料保存技術室主催講習会

所員を対象とした講習会を開催し、総計三五名の受講があった。

第一回 影写講習会

第二回 模写講習会

第三回 原本取り扱い講習会

第四回 写真室ガイダンス

②見学における制作実技及び作品発表

国内外の来賓等の来所に際し、技術部として制作実技及び作品発表をおこ

なった。なお、全室での対応の場合は室名を記していない。

二〇二三年六月二日 文科省研修生（修理室）

七月五日 中国人民大学

七月一三日 岡山朝日高校（修理室・影写室・模写室）

七月二七日 立教大学（影写室・模写室・写真室）

九月二八日 東京女子大学

十一月一日 中国人民大学

十一月三日 南京大学（写真室）

十二月二日 日本大学芸術学部（修理室・写真室）

計七五名
計二六名
計一二名
計一四名
計一四名
計一〇名
計一二名
計二三名

外部資金一覽

科学研究費助成事業

デジタル技術による金石文史料の研究資源化と学融合的歴史叙述への応用研究

研究種目	基盤研究(A)
課題番号	一九H〇〇五三六
研究期間	二〇一九～二〇二三年度
総額	六六三万円 (直接経費五一〇万円、間接経費一五三万円)
研究代表者	教授 菊地 大樹
コンテキストに応じた人文科学データパッケージ化に関する研究	
研究種目	基盤研究(A)
課題番号	二〇H〇〇〇一〇
研究期間	二〇二〇～二〇二四年度
総額	六六三万円 (直接経費五一〇万円、間接経費一五三万円)
研究代表者	教授 山家 浩樹
筆跡・花押情報の高度利活用研究―収集スキームの錬成と関連歴史情報との統合による―	
研究種目	基盤研究(A)
課題番号	二〇H〇〇〇二二
研究期間	二〇二〇～二〇二四年度
総額	七一五万円 (直接経費五五〇万円、間接経費一六五万円)
研究代表者	教授 末柄 豊

在外日本関係史料の調査と貴重史料の研究資源化による維新史料研究国際ハブ拠点の形成

研究種目	基盤研究(A)
課題番号	二〇H〇〇〇二三
研究期間	二〇二〇～二〇二三年度
総額	九六二万円 (直接経費七四〇万円、間接経費二二二万円)
研究代表者	教授 保谷 徹
外交の世界史の再構築・15～19世紀ユーラシアにおける交易と政権による保護・統制	
研究種目	基盤研究(A)
課題番号	二一H〇四三五
研究期間	二〇二一～二〇二四年度
総額	八五八万円 (直接経費六六〇万円、間接経費一九八万円)
研究代表者	教授 松方 冬子
断片的史料情報の集積と歴史知識情報の相互参照体制の確立による新たな史料学構築研究	
研究種目	基盤研究(A)
課題番号	二一H〇四三五六
研究期間	二〇二一～二〇二五年度
総額	六六三万円 (直接経費五一〇万円、間接経費一五三万円)
研究代表者	准教授 西田 友広
神社所蔵文書・社家文書の一体把握による中近世賀茂別雷神社の総合的研究	
研究種目	基盤研究(A)
課題番号	二二H〇〇〇一五
研究期間	二〇二二～二〇二六年度
総額	四九四万円

(直接経費三八〇万円、間接経費二一四万円)
繰越額二二二万円

研究代表者 教授 金子 拓
荘園絵図調査・解析方法に関する総括的研究と汎用的な歴史地理情報への応用研究

研究種目 基盤研究(A)
課題番号 二二H〇〇〇一六
研究期間 二〇二二～二〇二六年度
総 額 八七一万円

研究代表者 准教授 井上 聡
〔古文書科学〕の応用実践

研究種目 基盤研究(A)
課題番号 二二H〇〇〇一一
研究期間 二〇二二～二〇二七年度
総 額 一〇五三万円

研究代表者 特任助教 渋谷 綾子
大型絵図類のデータ構造化と関連史料の連携による南西諸島「海上の道」の復元的研究

研究種目 基盤研究(A)
課題番号 二二H〇〇〇一一
研究期間 二〇二二～二〇二六年度
総 額 一三三九万円

研究代表者 准教授 黒嶋 敏
〔原本史料情報解析〕の方法による中世西国武家文書の研究と展開

研究種目 基盤研究(B)
課題番号 二〇H〇一三〇七
研究期間 二〇二〇～二〇二三年度

総 額 三九〇万円

研究代表者 教授 本郷 恵子
近世書状史料群の研究と歴史情報資源化

研究種目 基盤研究(B)
課題番号 二二H〇〇六九一
研究期間 二〇二二～二〇二五年度
総 額 四五五万円

研究代表者 教授 松澤 克行
日本近世史料学の再構築―基幹史料集の多角的利用環境形成と社会連携を通じて

研究種目 基盤研究(B)
課題番号 二二H〇〇六九二
研究期間 二〇二二～二〇二四年度
総 額 五九八万円

研究代表者 教授 杉本 史子
幕末明治期古写真の調査とその解析・復元・保全を総合的に捉える写真史料学の構築

研究種目 基盤研究(B)
課題番号 二二H〇〇六五四
研究期間 二〇二二～二〇二六年度
総 額 五〇七万円

研究代表者 技術専門員 谷 昭佳
16世紀西日本港町の構造と相関―文献・考古学資料の国際・横断的分析による―

研究種目 基盤研究(B)

課題番号 二二H〇〇六六三
 研究期間 二〇二二～二〇二六年度
 総 額 四一六万円
 (直接経費三二〇万円、間接経費九六万円)
 研究代表者 准教授 岡 美穂子
 維新政府による朝廷・幕府・諸藩を源流とした文書行政の解明と関連史料群の学術資源化
 研究種目 基盤研究(B)
 課題番号 二二H〇〇六六四
 研究期間 二〇二二～二〇二七年度
 総 額 三一二万円
 (直接経費二四〇万円、間接経費七二万円)
 研究代表者 教授 箱石 大
 撰関家伝来大規模史料群の目録精緻化による構造の解明と研究資源化
 研究種目 基盤研究(B)
 課題番号 二二H〇〇六六五
 研究期間 二〇二二～二〇二七年度
 総 額 三九〇万円
 (直接経費三〇〇万円、間接経費九〇万円)
 研究代表者 教授 尾上 陽介
 日本中世古記録・文献史料の史料学的研究による朝廷制度史・政治史の考察
 研究種目 基盤研究(C)
 課題番号 二〇K〇〇九三三
 研究期間 二〇二二～二〇二四年度
 総 額 六五万円
 (直接経費五〇万円、間接経費一五万円)
 研究代表者 准教授 遠藤 珠紀
 東アジア墓葬文化の伝播と展開―金石文資料の形態的分析を中心に―
 研究種目 基盤研究(C)
 課題番号 二二K〇〇八三七

研究期間 二〇二二～二〇二五年度
 総 額 九一万円
 (直接経費七〇万円、間接経費二二万円)
 研究代表者 准教授 稲田 奈津子
 徳川政権による公儀の確立と城郭建設―無年号文書から公儀普請を読み解く―
 研究種目 基盤研究(C)
 課題番号 二二K〇〇八七二
 研究期間 二〇二二～二〇二四年度
 総 額 一〇四万円
 (直接経費八〇万円、間接経費二四万円)
 研究代表者 准教授 及川 亘
 預人の政治史的分析による近世中期幕藩国家政治構造の研究
 研究種目 基盤研究(C)
 課題番号 二二K〇〇八九一
 研究期間 二〇二二～二〇二四年度
 総 額 五二万円
 (直接経費四〇万円、間接経費一二万円)
 研究代表者 准教授 荒木 裕行
 近世初期大名発給無年号文書群の研究資源化―佐賀藩家臣坊所鍋島家史料を対象として―
 研究種目 基盤研究(C)
 課題番号 二二K〇〇八〇九
 研究期間 二〇二二～二〇二五年度
 総 額 一四三万円
 (直接経費一一〇万円、間接経費三三万円)
 研究代表者 教授 小宮 木代良
 日本中近世外交文書写本および外交文書集の史料学的研究
 研究種目 若手研究
 課題番号 二〇K一三一七二
 研究期間 二〇二二～二〇二三年度

総 額 一〇四万円

(直接経費八〇万円、間接経費二四万円)

研究代表者 准教授 岡本 真

日本近世における政教関係の形成と確立

研究種目 若手研究

課題番号 二一K一三〇九〇

研究期間 二〇二一～二〇二四年度

総 額 七八万円

(直接経費六〇万円、間接経費一八万円)

研究代表者 准教授 林 晃弘

持続性と利活用性を考慮したデジタルアーカイブシステム構築手法の開発

研究種目 若手研究

課題番号 二一K一八〇一四

研究期間 二〇二一～二〇二三年度

総 額 一四三万円

(直接経費二一〇万円、間接経費三三万円)

研究代表者 助教 中村 覚

今川了俊関係史料の分析による室町幕府地方支配の研究

研究種目 若手研究

課題番号 二三K一二二七三

研究期間 二〇二三～二〇二六年度

総 額 一〇四万円

(直接経費八〇万円、間接経費二四万円)

研究代表者 准教授 堀川 康史

近世後期の朝廷をめぐる政治文化の研究

研究種目 特別研究員奨励費(外国人)

課題番号 二二KF〇一〇七

研究期間 二〇二二～二〇二四年度

総 額 六〇万円

(直接経費六〇万円、間接経費〇円)

研究代表者 准教授 荒木 裕行(日本学術振興会外国人特別研究員 KIM, Hyunghin)

日本近世「公家」再考

研究種目 特別研究員奨励費

課題番号 二三KJ〇三四八

研究期間 二〇二三～二〇二五年度

総 額 九一万円

(直接経費七〇万円、間接経費二一万円)

研究代表者 日本学術振興会特別研究員 林 大樹

日本中世における交通像の復元―境界地域に着目して―

研究種目 特別研究員奨励費

課題番号 二三KJ〇八二一

研究期間 二〇二三～二〇二五年度

総 額 三九万円

(直接経費三〇万円、間接経費九万円)

研究代表者 日本学術振興会特別研究員 鈴木 沙織

日本中世の地方社会と仏教寺院

研究種目 研究成果公開促進費(学術図書)

課題番号 二三HP五〇六三

研究期間 二〇二三年度

総 額 一一〇万円

(直接経費一一〇万円、間接経費〇円)

研究代表者 外国人研究員 黄 霄龍

室町戦国法史論

研究種目 研究成果公開促進費(学術図書)

課題番号 二三HP五〇六六

研究期間 二〇二三年度

総 額 一九〇万円

(直接経費一九〇万円、間接経費〇円)

研究代表者 准教授 前川 祐一郎

大日本史料総合データベース(平安時代・全文)

研究種目 研究成果公開促進費(データベース)

課題番号 二三HP八〇〇五

研究期間 二〇二三年度

総額 三二〇万円

(直接経費三二〇万円、間接経費〇円)

研究代表者 教授 山口 英男

古記録フルテキストデータベース

研究種目 研究成果公開促進費(データベース)

課題番号 二三HP八〇〇六

研究期間 二〇二三年度

総額 一四〇万円

(直接経費一四〇万円、間接経費〇円)

研究代表者 准教授 遠藤 珠紀

○期間延長(新規の研究費の交付はなし)

漢籍書き入れの日本中世史料としての活用をめぐる研究

研究種目 基盤研究(C)

課題番号 一七K〇三〇六〇

研究期間 二〇一七～二〇二三年度

研究代表者 准教授 川本 慎自

高精細デジタル画像解析による幕末明治初期ガラス原板写真の史料学研究

研究種目 基盤研究(C)

課題番号 一九K〇〇九三四

研究期間 二〇一九～二〇二三年度

研究代表者 技術専門員 谷 昭佳

公家法・公家法・寺社法を中心とした中世法制史料の高度研究資源化

研究種目 基盤研究(C)

課題番号 二〇K〇〇九五六

研究期間 二〇二〇～二〇二三年度

研究代表者 准教授 前川 祐一郎

平安時代後期政治構造の史料学的研究

研究種目 若手研究

課題番号 一九K一三三三〇

研究期間 二〇一九～二〇二三年度

研究代表者 助教 黒須 友里江

諸社服忌令成立に関する研究―触穢観念の中近世的展開を視野に―

研究種目 若手研究

課題番号 二一K一三〇九一

研究期間 二〇二一～二〇二三年度

研究代表者 日本学術振興会特別研究員 小林 理恵

サファヴィー朝との合意文書によるオランダ東インド会社外交文書編纂の研究

研究種目 研究活動スタート支援

課題番号 二〇K二二〇一一

研究期間 二〇二〇～二〇二三年度

研究代表者 助教 大東 敬典

受託研究

AI等の活用を推進する研究データエコシステム構築事業

委託者 大学共同利用機関法人情報・システム研究機構

研究期間 二〇二三年度

研究経費 四八二万円

研究担当者 教授 尾上 陽介

高知県域に関する古代・中世史料の調査・収集と分析研究

委託者 高知県

研究期間 二〇二三年度

研究経費 八四万二六二二円

研究担当者 准教授 井上 聡

准教授 岡本 真

福岡市域に関わる史料の調査及び研究

委託者 福岡市史編集委員会

研究期間 二〇二三年度

研究経費 七十七万円

研究担当者 教授 山口 英男

准教授 岡本 真

加速器科学国際育成事業

委託者 大学共同利用機関法人高エネルギー加速器研究機構

研究期間 二〇二三年度

研究経費 六十六万円

研究担当者 技術専門職員 高島 晶彦

AI等の活用を推進する研究データエコシステム構築事業

委託者 大学共同利用機関法人情報・システム研究機構

研究期間 二〇二三年度

研究経費 三四〇万円

研究担当者 助教 中村 覚

人文学・社会科学データインフラストラクチャー強化事業

委託者 独立行政法人日本学術振興会

研究期間 二〇二三年度

研究経費 一二六七万五千円

研究担当者 教授 本郷 恵子

共同研究

時空間を越えたコミュニケーションに関する研究

共同研究機関 サントリーホールディングス・本学先端科学技術セン

ター

研究期間 二〇二三～二〇二四年度(二〇二三年一月～二〇二

四年九月)

研究経費 二五〇〇万円

研究分担者 教授 金子 拓

寄付金

研究期間 二〇二三年度

受入件数 一二件

受入金額 一二二五万円